

祇園遺跡第21次発掘調査報告書

2016

神戸市教育委員会

祇園遺跡第21次発掘調査報告書

2016

神戸市教育委員会

序

古代から海外との交易拠点となっていた神戸の地。ひときわ、山と海が近接した風光明媚な土地として、「平野」には平安時代末期に平家の別業が立ち並び、一時的には天皇や上皇、貴族も居を構えたことが史実として広く知られているところです。

祇園遺跡と楠・荒田町遺跡は、その所在地として近年の発掘調査の成果により、有力な情報が得られてきています。

今回は、祇園神社の南に位置する地点で発掘調査を行うことになりました。調査成果からは、平安時代末期のみではなく、それ以前の弥生時代の集落の存在を感じさせる遺物などが出土しています。この住みよい土地には、時を隔てて様々な人々が生活していたことが確認されました。

このように地下には地域の「記憶」が埋没しています。それらを調査し、後世に伝えることも現代を生きる私たちの責務と考えています。

最後に、発掘調査および本書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

神戸市教育委員会

例 言

1. 本書は、神戸市兵庫区上祇園町29・51番で実施した、祇園遺跡第21次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、共同住宅建設事業に伴うもので、株式会社 和田興産より委託を受けて神戸市教育委員会が調査主体として実施した。
3. 現地での調査は、平成26年7月14日～平成26年9月17日にかけて実施し、平成27年度は神戸市西区に所在する神戸市埋蔵文化財センターにて出土遺物の整理、発掘調査報告書の作成を行った。調査面積は、延べ1,240㎡である。
4. 現地での調査は神戸市教育委員会文化財課学芸員 川上厚志・岡田健吾が担当した。
5. 本書の編集は川上・岡田が行った。文章については、岡田が執筆した。
6. 現地での遺構写真撮影は調査担当者が行った。遺物写真撮影は杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。
7. 本書に使用した方位・座標は世界測地系第V系座標、標高は東京湾平均海水面（T.P.）で表示した。
8. 本書に記載した遺跡の位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」を、調査地点の位置図は、神戸市建設局発行2,500分の1地形図「諏訪山」を使用した。
9. 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、事業主である株式会社 和田興産に多大なる協力をいただいた。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 今回の調査について	1
(1) 調査に至る経緯	
(2) 発掘調査組織	
(3) 調査の経過	
(4) 調査日誌抄	
第2節 遺跡の地理的環境と歴史的環境	4
(1) 遺跡の地理的環境	
(2) 遺跡の歴史的環境	
第3節 祇園遺跡における過去の調査	10
第2章 発掘調査の成果	15
第1節 調査区の設定	15
第2節 1区の調査	15
(1) 基本層序	
(2) 1区の遺構	
第3節 2～4区の調査	21
(1) 基本層序	
(2) 2～4区の遺構	
第4節 出土遺物	32
(1) 弥生時代の遺物	
(2) 平安時代の遺物	
第3章 まとめ	45
第1節 遺構の変遷について	45
(1) 弥生時代の遺構	
(2) 平安時代の遺構	
第2節 平安時代中期の祇園遺跡周辺について	46

挿図目次

第1図 祇園遺跡の位置(S=1:25,000)	3
第2図 調査地の位置(S=1:2,500)	3
第3図 祇園遺跡周辺の主な遺跡(S=1:25,000)	5
第4図 祇園遺跡における過去の調査地(S=1:3000)	11
第5図 調査区地区割り配置図(S=1:300)	15
第6図 1区土層断面柱状図(S=1:20)	16
第7図 1区第1遺構面平面図(S=1:100)	17
第8図 1区礎石建物SB101平面・断面図(S=1:50)	17
第9図 1区第2遺構面平面図(S=1:100)	19
第10図 1区掘立柱建物SB201平面・断面図(S=1:50)	19
第11図 1区溝SD301～304平面・断面図(S=1:50)	20
第12図 1区第3遺構面平面図(S=1:100)	21
第13図 1区ピットSP404平面・断面図(S=1:20)	21
第14図 1区土坑SK401平面・断面図(S=1:50)	21
第15図 3・4区南壁土層断面図(S=1:100)	22

第16図	2～4区第1遺構面平面図(S=1:200)	23
第17図	2～4区第2遺構面平面図(S=1:200)	24
第18図	2区第2遺構面平面図(S=1:100)	25
第19図	3・4区第2遺構面平面図(S=1:100)	26
第20図	2区掘立柱建物SB202平面・断面図(S=1:50)	27
第21図	2区掘立柱建物SB203平面・断面図(S=1:50)	27
第22図	3区落ち込みSX201遺物出土状況・断面図(S=1:50)	28
第23図	2～4区第3遺構面平面図(S=1:200)	29
第24図	2-1区土器棺墓ST301出土状況平面・立面・断面図(S=1:20)	30
第25図	2-1・2区落ち込みSX301平面・断面図(S=1:50)	30
第26図	2-1・2区落ち込みSX301遺物出土状況(S=1:20)	30
第27図	3・4-8区第3遺構面平面図(S=1:100)	31
第28図	1区土坑SK401・その他出土遺物(S=1:4)	32
第29図	2-1区落ち込みSX301出土遺物(1)(S=1:4)	33
第30図	2-1区落ち込みSX301出土遺物(2)(S=1:4)	34
第31図	2-1区土器棺墓ST301出土遺物(S=1:4)	35
第32図	1区溝SD301～304出土遺物(S=1:4)	37
第33図	3区落ち込みSX201出土遺物(S=1:4)	39
第34図	平安時代の遺構出土遺物(S=1:4)	41
第35図	3区土器溜り出土遺物(S=1:4)	42
第36図	包含層出土遺物(S=1:4)	43

表 目 次

第1表	祇園遺跡における過去の調査一覧	14
第2表	遺物観察表	44

挿 図 写 真 目 次

写真1	1区人力掘削風景	2
写真2	2～4区ベルトコンベア使用状況	2

写 真 図 版 目 次

図版1	土器棺墓ST301出土遺物 出土陶磁器 落ち込みSX301出土遺物	図版9	2-3区第3遺構面全景(西から) 2-4区第3遺構面全景(南西から) 3-7区第3遺構面全景(南東から)
図版2	1区第1遺構面全景(南から) 1区礎石建物SB101(南東から)	図版10	4-5区第3遺構面全景(南東から) 4-6区第3遺構面全景(北西から) 3・4-8区第3遺構面全景(南から)
図版3	1区第2遺構面全景(南から) 1区第3遺構面全景(南から)	図版11	2-1区土器棺墓ST301遺物出土状況(南から) 2-1区落ち込みSX301遺物出土状況(北東から)
図版4	1区溝SD301～304(東から) 1区ピットSP209遺物出土状況(北から) 1区ピットSP404遺物出土状況(南から)	図版12	落ち込みSX301出土遺物
図版5	1区土坑SK401(東から) 2区第1遺構面全景(南西から) 3区第1遺構面全景(西から)	図版13	落ち込みSX301出土遺物
図版6	2～4区第2遺構面全景(南西から) 2～4区第2遺構面全景(北東から)	図版14	落ち込みSX301出土遺物
図版7	2区掘立柱建物SB202(北西から) 3区落ち込みSX201・ピット群(南東から)	図版15	落ち込みSX301出土遺物 土坑SK401出土遺物
図版8	2区第3遺構面全景(南西から) 2-1区第3遺構面全景(西から) 2-2区第3遺構面全景(西から)	図版16	溝SD301～304出土遺物
		図版17	溝SD301～304出土遺物
		図版18	落ち込みSX201出土遺物
		図版19	落ち込みSX201出土遺物
		図版20	その他出土遺物

第1章 はじめに

第1節 今回の調査について

(1) 調査に至る経緯

今回の調査地は、神戸市兵庫区上祇園町29・51に位置しており、神戸市埋蔵文化財分布図に記載されている祇園遺跡の範囲に含まれている。平成26年5月、この場所に共同住宅の建設が計画された。それに伴い試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財の存在が確認された。事業者との協議の結果、建物の基礎工事によって埋蔵文化財に影響があると判断された約485㎡について、発掘調査を実施することになった。

(2) 発掘調査組織

発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表（平成26年度）

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

工 楽 善 通 大阪府立狭山池博物館館長
菱 田 哲 郎 京都府立大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	雪村新之助
社会教育部長	東野展也
文化財担当部長	安達宏二
（文化財課長事務取扱）	
埋蔵文化財担当課長	千種 浩
（埋蔵文化財係長事務取扱）	
文化財専門役	丸山 潔
担当係長	前田佳久
埋蔵文化財センター担当係長	安田 滋
現場担当係長	齋木 巖
調査担当学芸員	川上厚志・岡田健吾
事務担当学芸員	山口英正・井尻 格・中村大介
遺物整理担当学芸員	口野博史・黒田恭正・佐伯二郎・阿部 功

(3) 調査の経過

調査対象範囲は、共同住宅部分と駐車場部分の大きく2ヶ所にわかれる。駐車場部分を1区とし、共同住宅部分は残土処理の関係から2～4区にわけて調査を進めた。1区では4面調査をおこない、2～4区では3面調査をおこなった。ただし、1区第2遺構面と第3遺構面は実質的に同一面であるため、本報告ではまとめて第2遺構面とし、第4遺構面を第3遺構面として記述する。また、2～4区の第3遺構面については、フーチング基礎工事による影響がある部分のみを調査の対象としており、全面的な調査はおこなわなかった。以上の結果、延べ調査面積は約1,240㎡となった。

各調査区は、工事の関係により外周を矢板で囲って作業を進めた。よって、断面の観察は調

査区内側の壁面でおこなった。また、1区では一部の矢板を外し、柱状図を作成した。

現地の調査は平成26年7月14日に開始し、9月17日に終了した。

(4) 調査日誌抄

平成26年

- | | | | |
|-------|--------------------------------|-------|--|
| 7月14日 | 調査開始。現地の設営をおこなう。 | 8月8日 | 1区土坑SK401を検出。1区調査終了。 |
| 7月15日 | 1区重機掘削開始。
包含層上面より人力掘削をおこなう。 | 8月11日 | 台風11号により溜まった水を排水。 |
| 7月17日 | 1区第1遺構面検出。
礎石建物SB101を検出。 | 8月12日 | 4区重機掘削開始。 |
| 7月18日 | 1区第1遺構面全景撮影。 | 8月19日 | 2～4区第2遺構面検出。 |
| 7月22日 | 2区重機掘削開始。 | 8月21日 | 2区掘立柱建物SB202を検出。 |
| 7月24日 | 1区礎石建物SB101完掘。 | 8月25日 | 2～4区第2遺構面全景撮影。 |
| 7月25日 | 1区第2遺構面検出。 | 8月29日 | 2-1・2区、4-5・6区
第3遺構面検出。土器棺墓ST301を検出。 |
| 7月28日 | 2・3区人力掘削開始。 | 9月2日 | 2-3・4区第3遺構面検出。 |
| 7月29日 | 1区第2遺構面全景撮影。 | 9月3日 | 3-7区第3遺構面検出。 |
| 7月30日 | 1区第3遺構面検出。
溝SD301～SD304を掘削。 | 9月8日 | 3-8区、4-5・6・8区
第3遺構面検出。 |
| 8月4日 | 雨で壁面が一部崩落。
現場復旧・排水をする。 | 9月9日 | 4-5・6区第3遺構面全景撮影。 |
| 8月5日 | 1区第3遺構面全景撮影。
2・3区第1遺構面全景撮影。 | 9月10日 | 2-1区で落ち込みSX301を検出。
3・4-8区第3遺構面全景撮影。 |
| 8月6日 | 1区第4遺構面検出。 | 9月12日 | 2-1・2・3・4区、
3-7区全景撮影。 |
| 8月7日 | 1区第4遺構面全景撮影。
3区第2遺構面検出。 | 9月17日 | 調査終了。埋戻し後、撤収する。 |



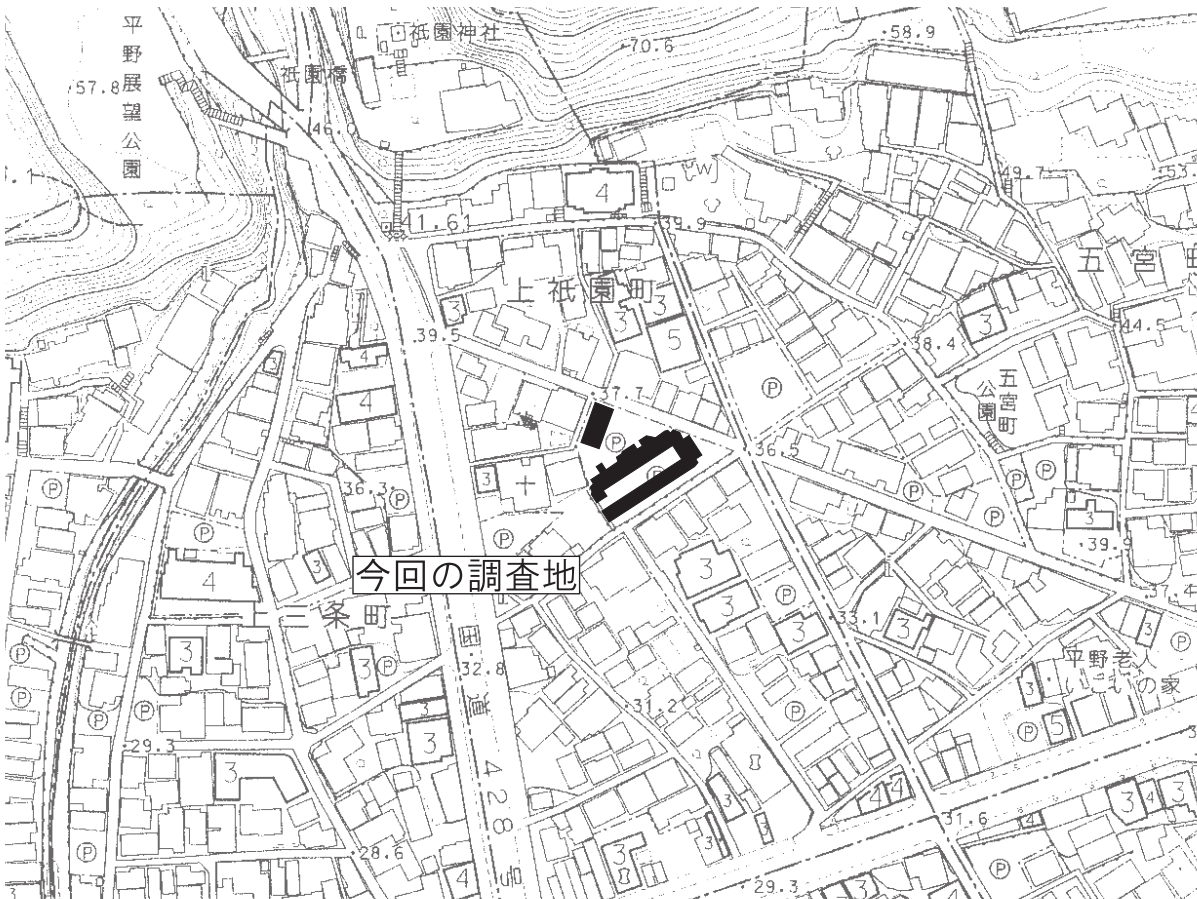
写真1 1区人力掘削風景



写真2 2～4区ベルトコンベア使用状況



第1図 祇園遺跡の位置 (S=1:25,000)



第2図 調査地の位置 (S=1:2,500)

第2節 遺跡の地理的環境と歴史的環境

(1) 遺跡の地理的環境

祇園遺跡は、兵庫区上祇園町・下祇園町・五宮町・上三条町・下三条町に広がる、縄文時代から中世の集落跡である。

遺跡のすぐ北側には、六甲山系の山地が迫っている。ここからは、天王谷川や石井川などの河川が流れ出しており、扇状地を形成している。遺跡が立地しているのは、この扇状地の扇頂部であり、天王谷川の左岸にあたる。天王谷川と石井川はやがて合流し、新湊川となり、大阪湾へと注いでいる。

また、遺跡の南東には、大倉山や宇治野山といった丘陵があり、その隙間を縫うように宇治川が大きく蛇行して流れ、大阪湾へと注いでいる。

遺跡の中心部には、南北方向に有馬街道が貫いている。この道は、六甲山系を通り抜けて、有馬や三田方面へ至る幹線道路であり、かつては天王谷越えといった。祇園遺跡周辺は、この道が平野部から峠越えへと差し掛かる入口にあたっており、交通の要衝であることがうかがえる。

この有馬街道沿いに鎮座するのが、遺跡名の由来にもなっている祇園神社である。社伝によれば、貞観11年(869)の創建であり、約1150年の歴史を持つという。また、遺跡の周囲には東福寺や祥福寺、五宮神社など由緒ある寺社仏閣が点在しており、古の趣きを色濃く残している。

(2) 遺跡の歴史的環境

祇園遺跡の所在する兵庫区とその周辺には、各時代の遺跡が数多く存在している。ここでは、時代ごとの主要な遺跡について見ていきたい。

旧石器時代・縄文時代

兵庫区周辺には、旧石器時代の遺跡は非常に少ない。わずかに、会下山遺跡で国府型ナイフ形石器が採集されているのが知られる。

縄文時代の遺跡についても、住居址などは発見されていないが、以下の遺跡から遺構や遺物が見つかっている。

宇治川南遺跡では、第1次調査(1983)で早期～晩期の幅広い時期の土器が出土している。その中には、関東地方の堀之内式や東北地方の大洞式土器が含まれており、当時の地域間交流を知るうえで重要な資料となっている。また、石棒や土偶が出土していることも特筆される。

楠・荒田町遺跡では、中期～晩期の遺構が見つかっている。第6次調査(1986)では、土坑から後期の宮滝式に属する深鉢2個体と注口土器が出土している。第16次調査(1992)では、土坑や貯蔵穴が見つかり、後期～晩期の複数形式の土器が出土している。第38次調査(2006)では、土坑から後期の土器と石器の剥片、石鏃や剥器がまとまって出土している。第47次調査(2010)では、中期の溝と土坑が見つかっている。

上沢遺跡第1次調査(1989)では、自然流路から晩期の長原式の土器が大量に出土している。また、落ち込みからは後期の北白川上層式の土器がまとまって出土している。

長田神社境内遺跡第1次調査(1987)では、土坑から晩期の滋賀里Ⅳ式の土器が出土しているほか、包含層より船橋式や長原式の土器が出土している。

五番町遺跡第5次調査(1994)では、土坑から後期の北白川上層式の深鉢が出土している。また、晩期後半に属する舟形土器も出土している。第10次調査(2000)では、土坑から晩期の船橋式の土器が出土している。



第3図 祇園遺跡周辺の主な遺跡 (S=1:25,000)

- | | | | | |
|-------------|---------------|--------------|--------------|-----------|
| 1. 祇園遺跡 | 9. 中宮古墳 | 17. 河原遺跡 | 25. 兵庫津遺跡 | 33. 五番町遺跡 |
| 2. 雪御所遺跡 | 10. 旧三の宮駅構内遺跡 | 18. 熊野遺跡 | 26. 大開遺跡 | 34. 長田南遺跡 |
| 3. 祇園神社裏山遺跡 | 11. 花隈城跡 | 19. 会下山二本松古墳 | 27. 塚本遺跡 | 35. 御船遺跡 |
| 4. 天王谷遺跡 | 12. 下山手遺跡 | 20. 会下山遺跡 | 28. 上沢遺跡 | 36. 御蔵遺跡 |
| 5. 楠・荒田町遺跡 | 13. 下山手北遺跡 | 21. 東山遺跡 | 29. 室内遺跡 | 37. 神楽遺跡 |
| 6. 中山手遺跡 | 14. 宇治川南遺跡 | 22. 兵庫松本遺跡 | 30. 名倉遺跡 | |
| 7. 中山手西遺跡 | 15. 湊川砲台跡 | 23. 兵庫松本西遺跡 | 31. 長田神社境内遺跡 | |
| 8. 中宮黄金塚古墳 | 16. 夢野丸山古墳 | 24. 湊川遺跡 | 32. 三番町遺跡 | |

弥生時代

弥生時代前期の代表的な集落としては、大開遺跡が挙げられる。第1次調査(1990)では、前期前半の環濠集落が見つかった。環濠は南北40m、東西70mに復元できる。環濠内外では、竪穴建物5棟が検出された。その後の調査では、この環濠の南東側で前期後半の環濠が見つかった。特に、第3次調査(1992)では竪穴建物3棟が検出され、第5次調査(1996)では環濠から多数の木製品が出土している。

楠・荒田町遺跡では、弥生時代前期末～中期を中心に展開する集落が見つかった。第1(1978)・5(1985)・6(1986)次調査などでは、合計40基以上の貯蔵穴が検出されている。また、第1次調査では銅鐸の鋳型が出土している。また、第6・17(1992)・20(1994)・32(2004)・45(2009)次調査では、中期の方形周溝墓が検出されている。竪穴建物は第1・5・32・45次調査などで、掘立柱建物は第5・16次調査などで見つかった。

弥生時代後期の集落としては、上沢遺跡が挙げられる。第16(1997)・19(1998)・33(1999)・51(2002)次調査などで後期の竪穴建物が見つかり、集落が展開していたことがうかがえる。また、第4次調査(1996)では後期の溝が検出されており、大量の土器が出土している。

長田神社境内遺跡では、後期以降の集落が見つかった。第1次調査(1987)では後期後半の竪穴建物4棟、掘立柱建物3棟や土器棺墓などが見つかった。第5(1991)・12(1998)次調査でも、後期の竪穴建物が複数検出されているほか、第10次調査(1997)では、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴建物9棟が見つかり、小型仿製鏡が出土している。

古墳時代

この地域に築造された古墳として、前期の古墳では、夢野丸山古墳や会下山二本松古墳が挙げられる。会下山二本松古墳は、以前は円墳と考えられていたが、調査によって全長55mの前方後円墳であることが判明している。墳丘は少なくとも二段築成で、葺石が存在する。

後期の古墳には、中宮古墳や中宮黄金塚古墳などがある。中宮黄金塚古墳は直径10mの円墳で、両袖式の横穴式石室を持つことが明らかとなっている。

弥生時代末期～古墳時代初頭の集落としては、兵庫松本遺跡が挙げられる。現在までに、竪穴建物20棟以上、掘立柱建物10棟が見つかり、この時期の集落の様相が明らかとなった。出土した土器には、他地域の要素を持つものが確認され、当時の集落間の交流を考える上で重要な資料となっている。

上沢遺跡では、古墳時代を通じて集落が継続することが明らかとなっている。複数の調査で竪穴建物や掘立柱建物が見つかったが、第10次調査(1997)では、古墳時代中期の竪穴建物5棟とともに、大壁造り建物2棟が見つかった。また、鉄製品や滑石製品、ガラス玉の他に、製塩土器や韓式系土器も出土しており、渡来人や祭祀との関係が指摘されている。

長田神社境内遺跡でも、弥生時代から連続して長期に集落が形成されていたことがわかっている。第5次調査(1991)では、古墳時代初頭の竪穴建物5棟、前期の竪穴建物5棟、中期以降の掘立柱建物1棟、後期の竪穴建物1棟が検出されている。第14次調査(2000)では、前期の溝から大量の土器が出土した。また、後期～飛鳥時代にかけての掘立柱建物が見つかった。

神楽遺跡では、第3次調査(1984)において、中期の掘立柱建物や竪穴建物などが見つかり、韓式系土器や滑石製紡錘車が出土している。第4次調査(1986)では、中期の井戸から滑石製勾玉、双孔円盤、白玉が出土しており、祭祀に関連する遺構であると考えられている。第2(1983)・7(1991)次調査では、後期の竪穴建物や掘立柱建物が多数検出されている。

飛鳥時代の遺跡としては、下山手北遺跡第2次調査(2005)において、掘立柱建物が7棟見つかり、在地の有力者に関連する施設であるとみられている。また、御蔵遺跡第51次調査(2002)では流路が見つかり、柵遺構が検出された。出土遺物には齋串を含む多量の木製品がある。また、帯金具が出土している。

奈良時代

奈良時代の遺跡としては、注目すべき遺跡として上沢遺跡が挙げられる。第31次調査(1999)では、井籠組の井戸から銅鏡や鉄製紡錘車が出土している。また、墨書土器や円面硯、金属製帯金具、銅製絞具、重圈文軒丸瓦、土馬、銅の溶解炉片など、官衙的な施設の存在をうかがわせる資料が発見されている。第4(1996)・5(1996)・9(1997)・10(1997)・30(1999)次調査などでは掘立柱建物が多数検出されている。また、第4次調査では半裁した丸太を削りぬいて作られた井戸が見つかり、第5次調査では銅製帯金具が出土している。第56次調査(2008)では、奈良時代の瓦が大量に出土している。隣接する室内遺跡でも、瓦や塑像が出土しており、この付近に存在した「房王寺」に関連するものとみられる。

御蔵遺跡では、第2次調査(1997)において、奈良時代後期の掘立柱建物3棟と井戸が見つかった。第3次調査(1997)では掘立柱建物11棟が、第9次調査(1998)では掘立柱建物4棟が見つかった。第59次調査(2006)では、和同開珎や銅製巡方が出土している。

平安時代

平安時代前期の遺跡としては、下山手北遺跡が特筆すべきものとして挙げられる。第1次調査(1995)では、平安時代前期の園池と掘立柱建物群が検出されている。遺構の配置から、貴族の邸宅を想起させるものである。また、皇朝十二銭の一つである「長年大宝」が計59枚出土しており、この施設が9世紀中葉に存在したことが明らかとなった。

御蔵遺跡では奈良時代から継続する遺跡が見つかり、第29次調査(2000)では、建築部材を転用した井戸が見つかり、白磁や緑釉陶器、皇朝十二銭の「富寿神宝」や「寛平大宝」が出土している。第27次調査(2000)でも、「富寿神宝」が3枚重なって出土している。第28次調査(2000)では硯や緑釉陶器、灰釉陶器が出土しており、第37次調査(2000)では青白磁合子や帯金具が出土している。また、第14次調査(1999)では、井戸から「大殿」と墨書された曲物出土している。第57次調査(2005)では、平安時代とみられる掘立柱建物3棟が見つかり、

神楽遺跡では、第1次調査(1979)で平安時代中期の溝が見つかり、多量の須恵器・土師器・黒色土器とともに、緑釉陶器や灰釉陶器が出土している。また、「東福」と書かれた墨書土器も出土している。第4次調査(1986)では正方位に建てられた大型の掘立柱建物が見つかり、

上沢遺跡では、第4次調査(1996)で平安時代中期と後期の掘立柱建物が見つかり、また、流路からは平安時代の土器が多数出土している。第9次調査(1997)では平安時代後期の掘立柱建物2棟と井戸が見つかり、第42次調査(2000)では平安時代の大型掘立柱建物が見つかり、第19次調査(1998)では緑釉陶器皿が出土している。

中世以降

平安時代末期の平家の邸宅や福原宮に関連する遺跡としては、祇園遺跡とともに楠・荒田町遺跡が挙げられる。兵庫県教育委員会の調査(2003)では、平安時代末期～鎌倉時代の二重の塙や櫓の跡が見つかり、調査地は平頼盛の邸宅跡に比定されており、見つかった遺構はこ

れに関連するものであると考えられている。第46次調査(2010)では、この二重の壕の続きが見つまっている。また、第26次調査(1998)では、この時期の区画溝とみられる遺構が見つまっている。第16次調査(1992)では、平安時代後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物10棟や柵列が見つかっており、石帯が出土している。

楠・荒田町遺跡では、平家滅亡後の集落も見つまっている。第53次調査(2012)では、平安時代末期～鎌倉時代初頭の掘立柱建物3棟と木棺墓2基、鎌倉時代の掘立柱建物1棟と土壙墓1基が検出されている。墓から出土した遺物には、青磁碗、青白磁合子、鉄刀子、和鏡などが含まれる。これらの遺構は在地の有力者の邸宅と屋敷墓であると考えられる。第19次調査(1992)でも中世の掘立柱建物群が見つまっている。第54次調査(2012)では、明治時代の煉瓦積建物基礎・八角形煙突・煙道などが見つかった。これらは燐寸工場の一部であることが明らかとなっている。

長田神社境内遺跡では、第1次調査(1987)で平安時代末期の木棺墓や鎌倉時代頃の井戸3基が見つまっている。第6(1996)・10(1997)次調査では、中世の掘立柱建物が複数検出されている。第7次調査(1996)では、戦国時代の方形区画や近世の長田神社の神官屋敷跡が見つかった。第14次調査(2000)では、福聚寺の旧本堂の基壇跡が見つかっており、建物の変遷が判明した。また、近世の水琴窟を伴う軒先手水鉢が見つまっている。

花隈城跡では、第1次調査(2003)で野面積みの石垣が見つかっており、花隈(熊)城に伴うものである可能性が指摘されている。第3次調査(2006)では、16世紀後半の瓦がまとまって出土しており、一部は二次被熱があると報告されている。花隈(熊)城の落城時の瓦であるとみられる。

兵庫津遺跡は調査例が多く、様々な調査成果が上がっているが、近年では第57(2012)・62(2014)次調査で兵庫城の石垣が発見されたことが特筆される。

参考文献

楠・荒田町遺跡

丸山潔編『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1980

「楠・荒田町遺跡」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1988

丸山潔編『楠・荒田町遺跡Ⅲ』神戸市教育委員会 1990

「楠・荒田町遺跡 第11次調査」「楠・荒田町遺跡 第12次調査」『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1995

「楠・荒田町遺跡 第13次調査」『平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1997

岡田章一編『楠・荒田町遺跡』兵庫県文化財調査報告第162冊 兵庫県教育委員会1997

別府洋二編『楠・荒田町遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第339冊 兵庫県教育委員会2008

「楠・荒田町遺跡 第38次調査」『平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2009

富山直人・小林さやか編『楠・荒田町遺跡 第42・43・46次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2011

「楠・荒田町遺跡 第45次調査」『平成21年度 神戸市埋蔵文化財年報』2012

「楠・荒田町遺跡 第47次調査」『平成22年度 神戸市埋蔵文化財年報』2013

関野豊編『楠・荒田町遺跡 第53次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2014

黒田恭正編『楠・荒田町遺跡 第54次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2014

中宮黄金塚古墳

「中宮黄金塚古墳」『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994

花隈城跡

「花隈城跡 第1次調査」『平成15年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2006

「花隈城跡 第3次調査」『平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2009

下山手北遺跡

「下山手北遺跡 第2次調査」『平成17年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2008

宇治川南遺跡

「宇治川南遺跡」『昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1986

会下山二本松古墳

「会下山二本松遺跡」『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1987

会下山遺跡

喜谷美宣「旧石器・縄文時代」『新修神戸市史 歴史編 I 自然・考古』神戸市1989

兵庫松本遺跡

中谷正編『兵庫松本遺跡 第2～4・12・17・19次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2011

大開遺跡

前田佳久編『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1993

「大開遺跡 第3次調査」『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1995

「大開遺跡 第7次調査」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1999

山田佑生編『大開遺跡 第14次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2014

上沢遺跡

阿部敬生編『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1995

「上沢遺跡 第3次調査」「上沢遺跡 第4次調査」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1999

「上沢遺跡 第9次調査」「上沢遺跡 第15次調査」『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000

「上沢遺跡(第16・19・20・24・28・29・30次調査)」『平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2001

「上沢遺跡 第32次-1・2調査」「上沢遺跡 第33次調査」『平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2002

「上沢遺跡(第37・39・42・43・44次調査)」『平成12年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2003

「上沢遺跡 第42次調査」『平成12年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2003

「上沢遺跡 第51次調査」『平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2005

小林さやか編『上沢遺跡第55次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2009

「上沢遺跡 第56次調査」『平成20年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2011

室内遺跡

水口富夫他「室内遺跡」『平成9年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1998

長田神社境内遺跡

黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会1990

「長田神社境内遺跡 第5次調査」『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994

「長田神社境内遺跡 第6次調査」『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1995

「長田神社境内遺跡 第7次調査」『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1995

「長田神社境内遺跡 第10次調査」『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000

「長田神社境内遺跡 第12次調査」『平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2001

「長田神社境内遺跡 第14次調査」『平成12年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2003

御蔵遺跡

「御蔵遺跡 第2次調査」「御蔵遺跡 第3次調査」『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000

山田清朝編『御蔵遺跡 第8・9・10次調査』神戸市教育委員会2000

安田滋編『御蔵遺跡 第4・6・14・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2001

富山直人他編『第5・7～13・18～22・24・28・29・31・33～36・39・41・43次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2003

谷正俊編『御蔵遺跡 V 第26・37・45・51次調査』神戸市教育委員会2003

「御蔵遺跡 第51次調査」『平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2005

「御蔵遺跡 第57次調査」『平成17年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2008

「御蔵遺跡 第59次調査」『平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2009

五番町遺跡

「五番町遺跡 第5次調査」『平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1997

「五番町遺跡 第10次調査」『平成12年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2003

神楽遺跡

菅本宏明編『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1981

「神楽遺跡」『昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1986

「神楽遺跡」『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1987

「神楽遺跡」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1989

「神楽遺跡」『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994

第3節 祇園遺跡における過去の調査

祇園遺跡の調査は、平成5年度に第1次調査がおこなわれて以来、今回の調査で21次を数える。過去の調査では、縄文時代から近世にいたる各時代の遺構や遺物が発見されている。そのなかでも、弥生時代中期～古墳時代前期と平安時代後期の2時期は、とくに大きな成果が上がっている。ここでは、時代ごとに過去の調査成果を振り返っておく。

縄文時代

第1・2次調査で流路が検出されており、早期と前期の土器片や石器が出土している。祇園遺跡では、これ以外に縄文時代の遺構は見つかっておらず、人々の生活の痕跡は希薄である。

弥生時代

祇園遺跡では今のところ、弥生時代前期～中期中葉の遺構や遺物は見つかっていない。この地に集落が展開されるのは中期後半以降である。

第5次調査では中期後半の竪穴建物1棟が検出されている。建物は平面円形で、直径約6.6mを測る。中央土坑には焼土が混じっており、埋土には炭化物を含んでいたことが報告されている。

第6次調査では中期後半の南北方向に走る溝2条が検出された。溝の幅は1m程で、それぞれの溝の間隔は約10mである。集落を囲む溝の可能性が考えられる。

第7次調査では後期の竪穴建物2棟が検出された。平面円形の建物が重複して検出されており、建て替えが行われたとみられる。多数の柱穴や地床炉が見つかっており、床面上面や覆土からは土器が出土している。建物の径は5.7m×4.6m以上である。

第14次調査では中期後半の竪穴建物4棟が検出されている。建物はいずれも平面円形で、直径6～8m前後を測る。建物のなかには、いわゆる「1〇(いちまる)土坑」を持つものや、焼失住居とみられるものがある。

弥生時代末～古墳時代初頭

第1次調査では弥生時代末～古墳時代初頭の溝や竪穴建物1棟が検出されている。竪穴建物は平面円形で、直径約5mを測る。床面から土器と砥石が出土しており、埋土上層からは多量の土器が投棄された状態で出土している。

第7次調査でも弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物1棟が検出されている。建物は一辺約5mの平面方形で、ベッド状遺構が囲んでいることが確認されている。床面から土器が出土している。

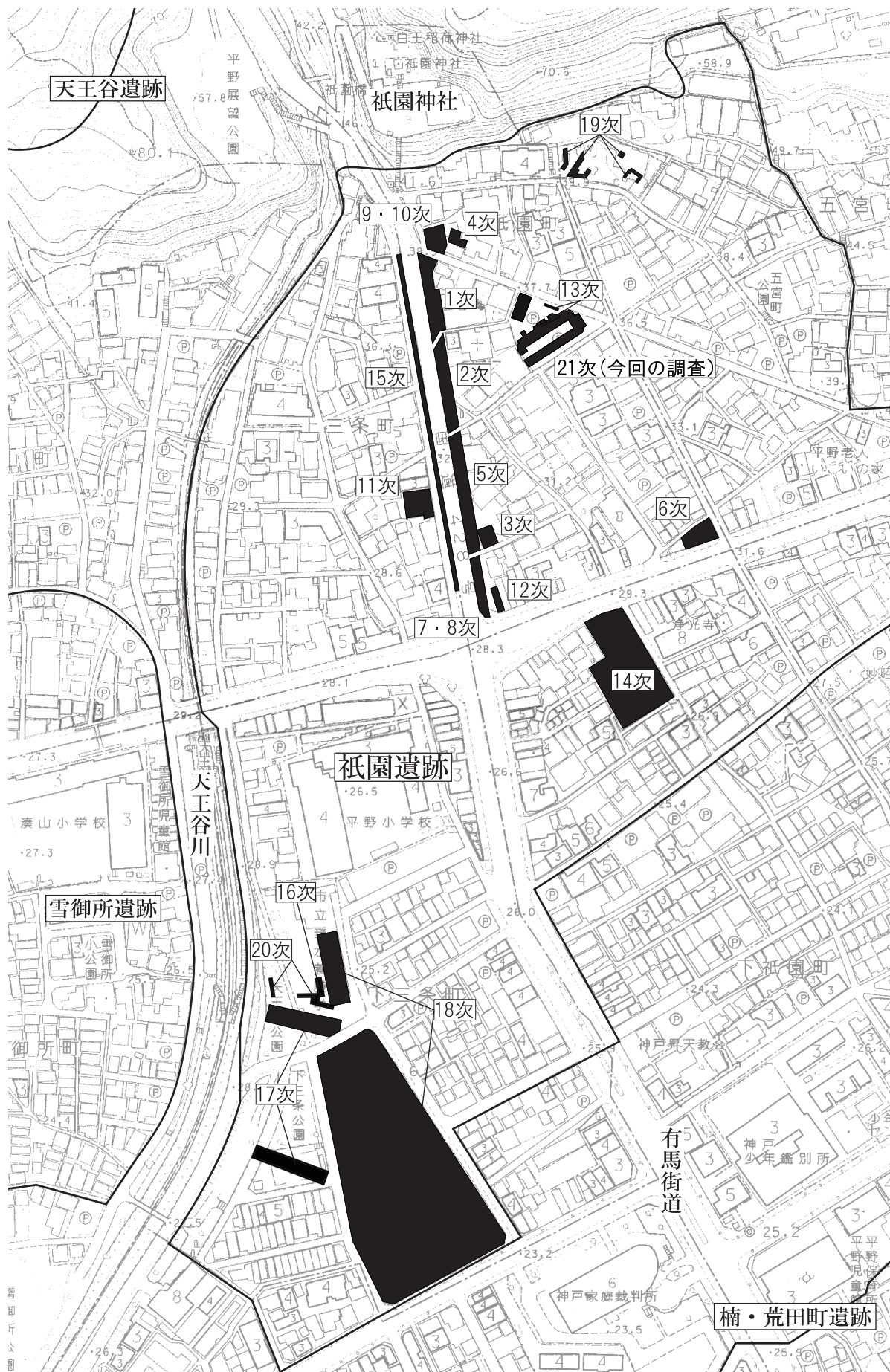
第7次調査に隣接する地点で行われた第8次調査では、弥生時代末～古墳時代前期の大溝が見つかった。幅10m以上、深さ1.5m以上の規模があるとみられる。溝の下層からは大量の土器が出土している。

第14次調査では、古墳時代前期の竪穴建物1棟が見つかっている。建物は平面方形で、周囲にベッド状遺構を巡らせる。

第15次調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物1棟が検出されている。狭い調査区なので全容は不明であるが、建物は一辺4m程の方形であるとみられる。

また、第19次調査では、少量ながら古墳時代初頭の土器が出土しており、遺跡の北辺まで集落が展開していた可能性を示している。

このように祇園遺跡では、弥生時代中期後半以降、竪穴建物が出現することが明らかとなっており、集落が形成されたことがわかる。中期後半には集落の中心は遺跡内でも東寄りであったようだが、後期以降は平野交差点の北側にも展開するようである。集落は古墳時代初頭まで



第4図 祇園遺跡における過去の調査地 (S=1:3,000)

継続するが、古墳時代前期には遺構が激減し、やがて集落も廃絶したようである。その後、古代を通じて、遺構がほとんど見つからない時期が続く。

平安時代後期

平安時代後期になり、祇園遺跡周辺にはわかに歴史の表舞台に登場することになる。よく知られているように、平清盛による別業の造営、治承四年(1180)のいわゆる「福原遷都」など、一連の平氏政権の動向によるものである。

仁安三年(1168)、平清盛は出家し、福原の雪見御所に隠棲する。この御所には、後白河法皇も度々行幸されたことが古記録からうかがい知ることができる。その後、治承三年(1179)の政変を経て、翌年にはいわゆる「福原遷都」が起こる。約半年の間、後白河法皇・高倉上皇・安徳天皇の三帝が福原の地に滞在された。

祇園遺跡では、これらの出来事に関連すると考えられる遺構・遺物が多く発見されている。

第2・5・15次調査では石敷を伴う12世紀後半の園池遺構を検出しており、同一の遺構であるとみられている。園池には、導水路や排水路とみられる施設が伴っており、12世紀後半の短い期間の間に2回の改修が行われたことが明らかとなった。園池からは京都系土師器皿や山城系瓦などの遺物が多数出土しており、京都とのつながりを感じさせる。

第3次調査では、明確な遺構は検出されなかったものの、渥美甕や白磁四耳壺・水注などの陶磁器とともに、国内では出土例の極めて少ない中国吉州窯産の玳瑁天目小碗が出土しており注目される。

第14次調査においては、掘立柱建物、井戸、区画溝などの遺構が検出されている。掘立柱建物は3棟検出されており、それぞれ同一方向に建てられている。また、建物と同方向に掘られた溝からは多量の土師器皿や白磁水注などが出土している。建物に先行する井戸からは土師器皿や瓦器碗、白磁・青磁や青白磁合子などが出土している。一連の遺構は、12世紀後半の短期間に存在したものとみられている。

第16・20次調査では、落ち込みが検出され、大量の土師器皿が出土した。園池遺構の一部である可能性がある。

第17次調査では、園池遺構の可能性のある窪みが検出され、大量の土師器皿が出土した。土師器皿は窪みの底に敷き並べるように出土している。また、同時期の土坑も検出されており、瓦器や須恵器、土師器が大量に出土している。

第18次調査では、同じ方向に並んだ掘立柱建群や区画溝、園池遺構、石組遺構、道路遺構などが検出された。掘立柱建物は合計8棟見つかった。大きな建物は、梁行6間×桁行2間の母屋に2間×3間の出庇が付くという規模である。道状遺構は両側に側溝を伴うもので、埋土からは多量の土師器皿が出土している。また、石を敷き詰めた溝状の遺構が検出されており、注目される。

このように祇園遺跡では、12世紀後半の短い期間に数々の大規模な造営が行われており、大量の京都系土師器皿や陶磁器の優品が消費されていたことが明らかとなっている。これらは、平家の邸宅や福原宮に関連するものとみて間違いのないであろう。

中世以降

平家が滅亡して以降、中・近世の祇園遺跡周辺には耕作地が広がっていたと考えられる。

鎌倉時代の様相は詳しくわかっていない。わずかに、第15次調査でピットや土坑が検出されている程度である。

室町時代の遺構としては、第1・2次調査では石組溝が見つかっており、第17次調査では石組の段が見ついている。いずれも耕作に関係する遺構であると考えられる。

江戸時代の遺構は、第1・2次調査では井戸が見つかっており、第13・17次調査では圃場が見ついている。

遺跡周辺は、江戸時代には奥平野村の範囲に含まれていた。奥平野村の中心は、現在の五宮町付近にあった。今回の調査地は、集落の西端にあたるようである。この村は、旗本の畠山氏・片桐氏と幕府の三者の領地が存在したことが知られている。また、神戸村の庄屋である生島四郎太夫の別邸が所在し、幕末には勝海舟が寓居したことでも知られている。近年まで、この邸宅の門や庭園が残されていたが、開発によって消滅してしまっている。

参考文献（番号は第1表に対応する）

- 1 『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1995
- 2 『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1998
- 3 富山直人編『祇園遺跡第5次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2000
- 4 『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1998
- 5 『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
- 6 『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2001
- 7 『平成16年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2007
- 8 『平成17年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2009
- 9 内藤俊哉編『祇園遺跡第14次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2013
- 10 阿部功編『祇園遺跡第15次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2013
- 11 『平成24年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2015
- 12 内藤俊哉編『祇園遺跡第17・18次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2016
- 13 『平成25年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2016

次数	調査地	面積	調査期間	主要な成果	文献
1次	兵庫区上祇園町	300㎡	平成6年1月13日～平成6年3月22日	縄文時代の流路、弥生時代末の竪穴建物、石製丸柄、軒瓦	1
2次	兵庫区上祇園町	380㎡	平成6年6月15日～平成6年12月13日	平安時代後期の園池・導水路、山城系瓦、大量の土師器皿	2
3次	兵庫区上祇園町	56㎡	平成6年6月23日～平成6年7月14日	常滑甕、渥美甕、白磁四耳壺・水注、玳瑁天目小碗、石鍋、播磨系瓦	2
4次	兵庫区上祇園町	20㎡	平成7年11月8日～平成7年11月14日	平安時代後期の溝	-
5次	兵庫区上祇園町	500㎡	平成7年8月3日～平成8年2月15日	弥生時代中期の竪穴建物、平安時代後期の園池・排水路、軒平瓦、大量の土師器皿	3
6次	兵庫区上祇園町	100㎡	平成8年5月17日～平成8年5月28日	弥生時代中期の溝	4
7次	兵庫区上祇園町	68㎡	平成10年12月2日～平成11年1月11日	弥生時代後期・末の竪穴建物、弥生土器	5
8次	兵庫区上祇園町	152㎡	平成11年4月2日～平成11年5月18日	弥生時代後期～古墳時代前期の大溝、庄内期土器	6
9次	兵庫区上祇園町	19㎡	平成13年6月26日～平成13年6月27日	特になし	-
10次	兵庫区上祇園町	40㎡	平成14年1月22日～平成14年2月1日	弥生時代後期のピット	-
11次	兵庫区上三条町	40㎡	平成16年9月14日～平成16年10月1日	山城系瓦	7
12次	兵庫区上祇園町	60㎡	平成16年11月24日～平成16年12月10日	弥生時代末の竪穴建物	7
13次	兵庫区上祇園町	23㎡	平成17年5月23日～平成17年6月9日	平安時代後期の池？	8
14次	兵庫区下祇園町	1000㎡	平成23年8月3日～平成23年11月19日	弥生時代中期・古墳時代前期の竪穴建物、平安時代後期の掘立柱建物・井戸・区画溝、大量の土師器皿、白磁水注、青白磁合子	9
15次	兵庫区上三条町	210㎡	平成23年9月14日～平成24年2月21日	弥生時代末の竪穴建物、平安時代後期の園池遺構、弥生土器、軒平瓦	10
16次	兵庫区下三条町	40㎡	平成24年7月9日～平成24年8月22日	平安時代後期の落ち込み、大量の土師器皿	11
17次	兵庫区下三条町	780㎡	平成25年1月10日～平成25年3月28日	平安時代後期の園池か、室町時代の石列、大量の土師器皿	11
18次	兵庫区下三条町	5700㎡	平成25年4月1日～平成25年12月16日	平安時代後期の掘立柱建物・区画溝・井戸・石組遺構・道状遺構、大量の土師器皿・白磁	12
19次	兵庫区上祇園町	120㎡	平成25年4月18日～平成25年5月30日	古墳時代初頭の土器	13
20次	兵庫区下三条町	76㎡	平成26年2月24日～平成26年3月14日	平安時代後期の落ち込み、土師器皿、白磁（16次調査の落ち込みと同一遺構）	13
21次	兵庫区上祇園町	485㎡	平成26年7月15日～平成26年9月17日	弥生時代後期の土器棺墓・土器溜り、平安時代中期の掘立柱建物・落ち込み、平安時代後期の掘立柱建物、緑釉陶器	本書

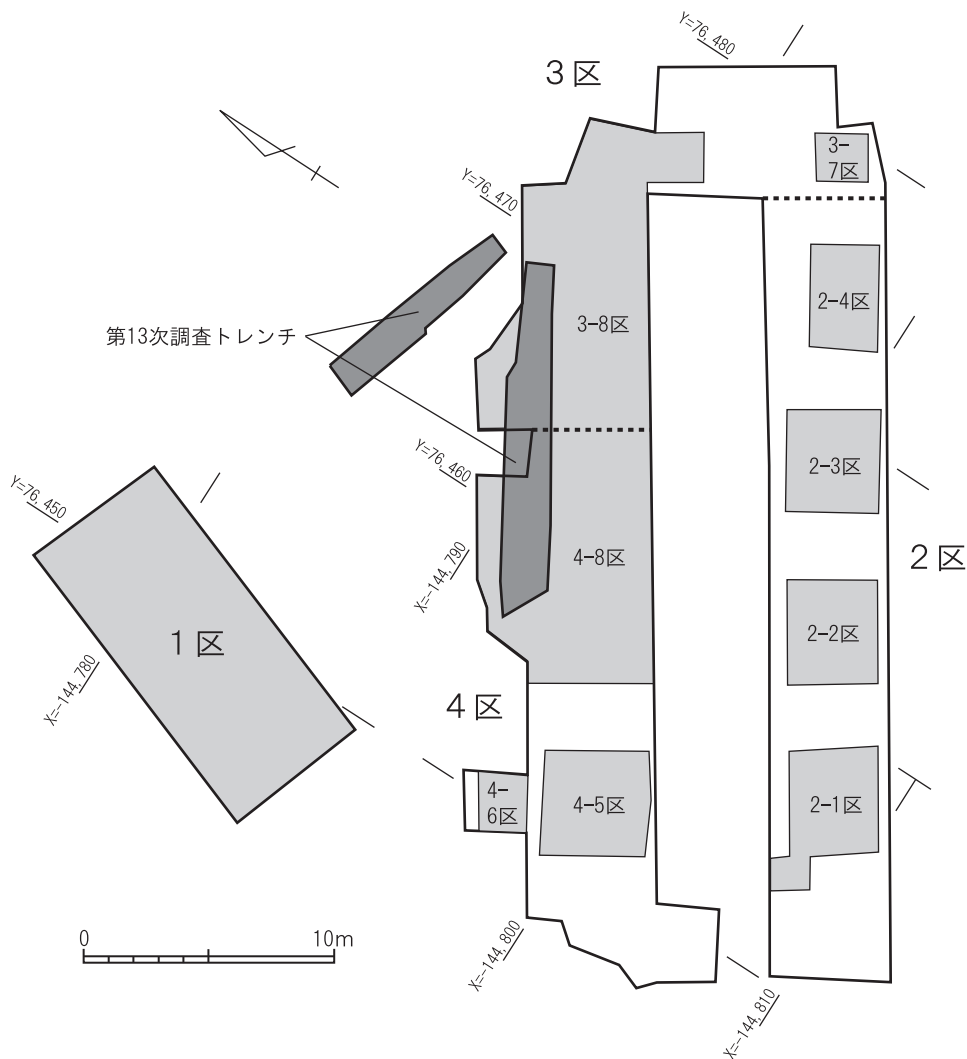
第1表 祇園遺跡における過去の調査一覧

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査区の設定(第5図)

第1章に記したように、調査区は全4区にわけて作業を進めた。また、2～4区の第3遺構面については、いくつかのブロックにわけて掘削を進めた。各ブロックには枝番号をつけて、2-1区のように表した。第5図の薄い灰色部分が第3遺構面まで調査した範囲である。

また、今回の調査地は、第13次調査地点と一部が重複している(第5図の濃い灰色部分)。この調査は遺構の存否確認が目的であったため、今回の調査の第1遺構面相当までで調査を終えている。



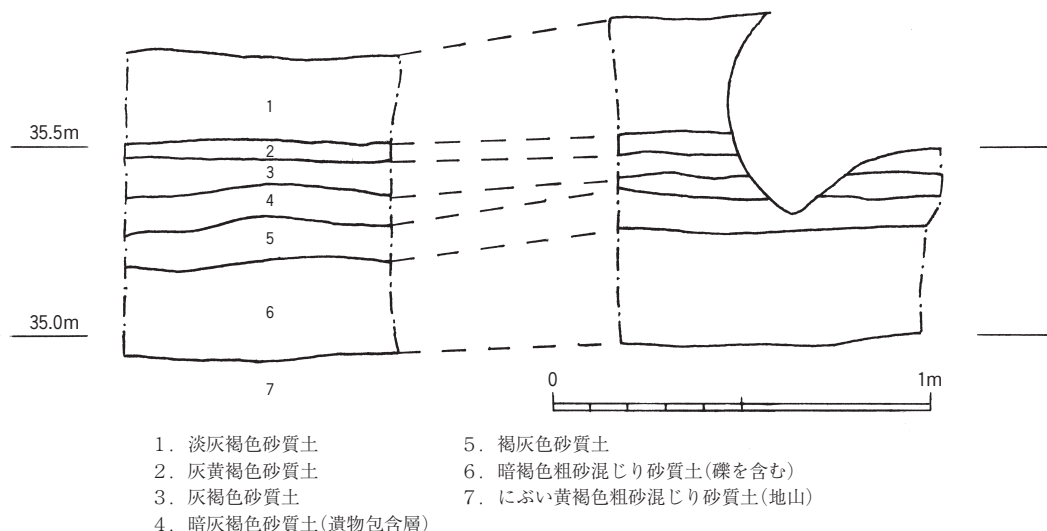
第5図 調査区地区割り配置図 (S=1:300)

第2節 1区の調査

(1) 基本層序(第6図)

調査地の現地表面の標高は約37.2mである。調査地周辺は北東から南西に向かって傾斜地になっており、調査地北側の道路と南側の道路では約2mの高低差が生じている。調査地の敷地全体は、盛土による造成がされており、平坦面が形成されている。

1区では、現地表下約1.4mまでは現代の盛土・攪乱層である。その下層には、近代以前の旧耕土層や床土層が約0.4mにわたり堆積している。続いて、遺物包含層である暗灰褐色砂質土が



第6図 1区土層断面柱状図 (S=1:20)

約0.1m堆積している。その下層に、褐灰色砂質土層が約0.1m堆積しており、その上面が第1遺構面となる。さらに下層には、暗褐色粗砂混じり砂質土層が約0.3m堆積しており、この上面が第2遺構面である。その下層は、地山層であるにぶい黄褐色粗砂混じり砂質土層があり、この上面が第3遺構面となる。

各遺構面の標高は、第1遺構面が約35.2～35.4m、第2遺構面が約35.1～35.3m、第3遺構面が約34.8～35.0mである。

(2) 1区の遺構

①第1遺構面(第7図)

同一方向に走る複数の溝群とピット、礎石建物1棟を検出した。

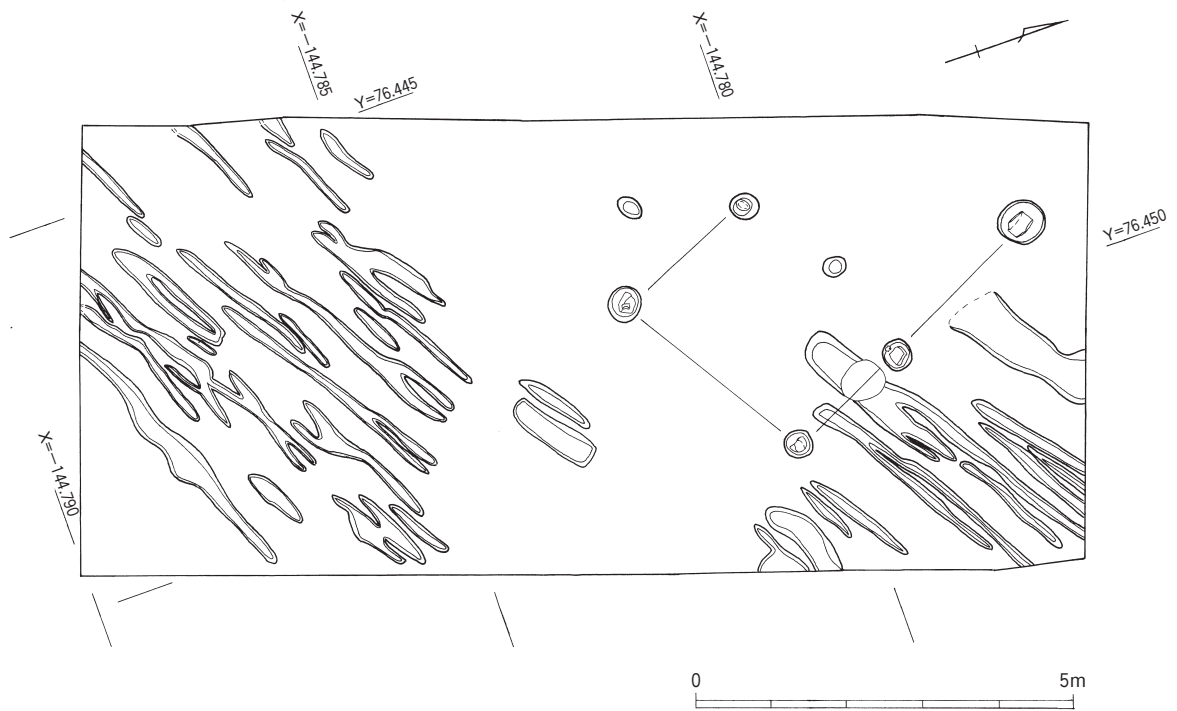
溝群は耕作に伴うものであると考えられる。各溝の規模は、幅0.1～0.4m、深さ0.05～0.1m程度である。溝の方向はN60°E前後である。遺物がほとんど出土しておらず、詳細な遺構の時期は決定しがたいが、直上の包含層からは平安時代中期～後期の土器が出土しており、それ以降の時期の遺物はほとんどみられないので、平安時代後期頃までの遺構だと考えられる。

礎石建物SB101(第8図)

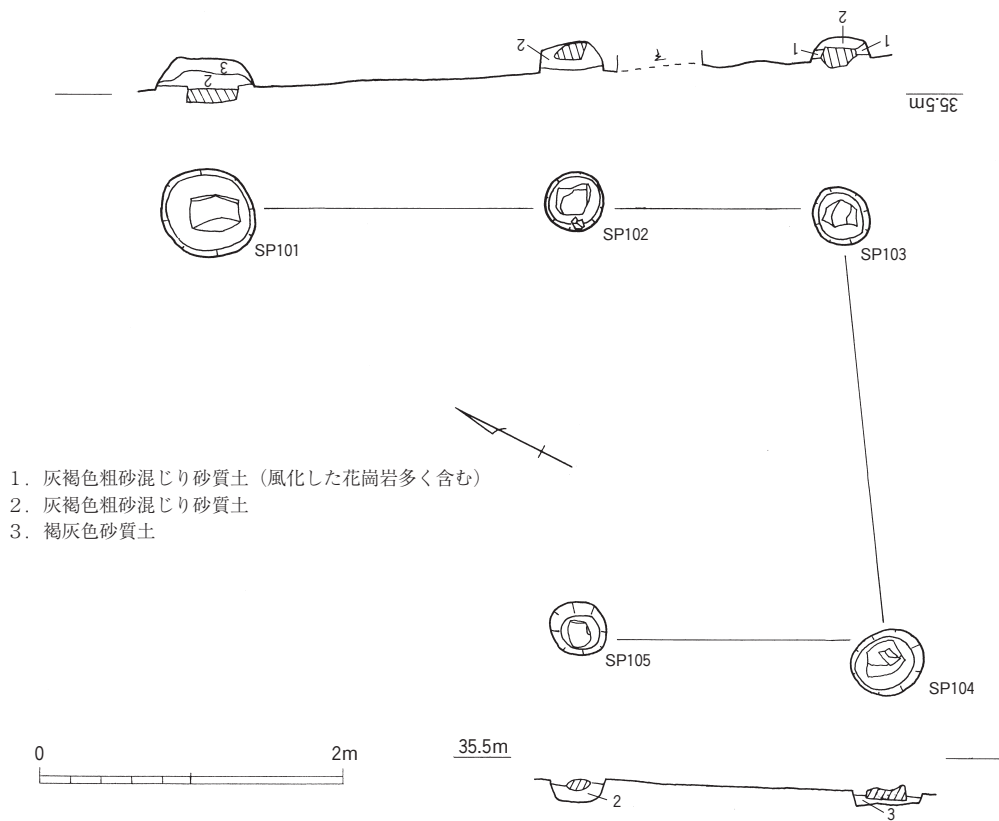
調査区北側で検出した建物跡である。柱穴は2間×1間(SP101～105)を検出した。ただし、SP101はそれ以外の柱穴と比較して、柱穴の直径や礎石が一回り大きいこと、柱間寸法がずれること、礎石上面のレベルが0.25mほど高いことなどから、一連の礎石列とは組み合わせない可能性がある。

建物の方向はN27°Wである。柱穴は直径0.4～0.6m前後で、深さ約0.2mである。柱間寸法は、南北が1.8m、東西が2.8mで、SP101とSP102の間は2.4mである。礎石は長軸0.2～0.3m前後の花崗岩で、比較的丸みを帯びた礫である。礎石の一部は、上面を平坦に加工して柱座を造り出している。また、火を受けた痕跡がみられる礎石も含まれる。周囲には焼土などが広がらないことから、別の場所で火を受けた礎石を再利用した可能性が考えられる。

遺構の時期は、出土遺物が少なく詳細な時期を決定しがたいが、平安時代中期～後期頃と考えられる。また、後述する溝SD301～304の埋土を切って柱穴が掘削されていることから、それより新しいことがわかる。さらに、溝群とは埋土が異なっており、時期が異なる可能性がある。



第7図 1区第1遺構面平面図 (S=1:100)



第8図 1区礎石建物SB101平面・断面図 (S=1:50)

②第2遺構面（第9図）

平安時代中期の遺構面である。掘立柱建物や多数のピット群、溝などを検出した。

ピット群は調査区全体で検出している。ピットの規模は、大半が直径0.2～0.4m、深さ0.15～0.4mに収まる。複数の掘立柱建物や柵列が存在した可能性が考えられるが、建物を復元できたのは後述するSB201のみである。

掘立柱建物SB201（第10図）

調査区の南半で検出した掘立柱建物である。柱穴は調査区内で2間×2間を検出したが、建物は調査区外へ広がってさらに大きくなる可能性がある。柱穴は直径0.4～0.5m程で、深さ0.15～0.3m前後を測る。建物の方向はN24°Wで、柱間寸法は約2.1mである。柱穴SP207・209からは、ほぼ完形の土師器皿が出土している。建物の時期は、11世紀後半であると考えられる。

溝SD301～SD304（第11図）

調査区北半で検出した溝群である。中央を島状に残して、その周りに縦横に溝が走っている。便宜的にSD301～304の4つの溝としてとらえた。それぞれの溝の幅は1.0～1.6m前後、深さは検出面から0.15m程度である。北側のSD304付近ではやや深くなっているが、南側のSD303付近では0.1m未満と浅い。特に、SD303の西半では遺構の輪郭も曖昧であり、埋土も少し異なることから、一連の溝とは異なる可能性もある。溝の方向は、SD301とSD302がN24°Wであり、掘立柱建物SB201と同じ方向である。

各溝の切り合い関係を明らかにするために、畦を設定して断面観察を行ったが、明確な切り合い関係は確認できなかった。埋土はほぼ単一層であり、炭化物と土器片が万遍なく含まれているのが特徴的である。流水の痕跡もみられなかった。よって、これらの溝は機能時には空の状態であり、ある段階で同時に埋められた可能性が考えられる。

埋土からは土師器皿、瓦器碗、須恵器碗など多数の土器が出土している。遺構の時期は、11世紀後葉と考えられる。

③第3遺構面（第12図）

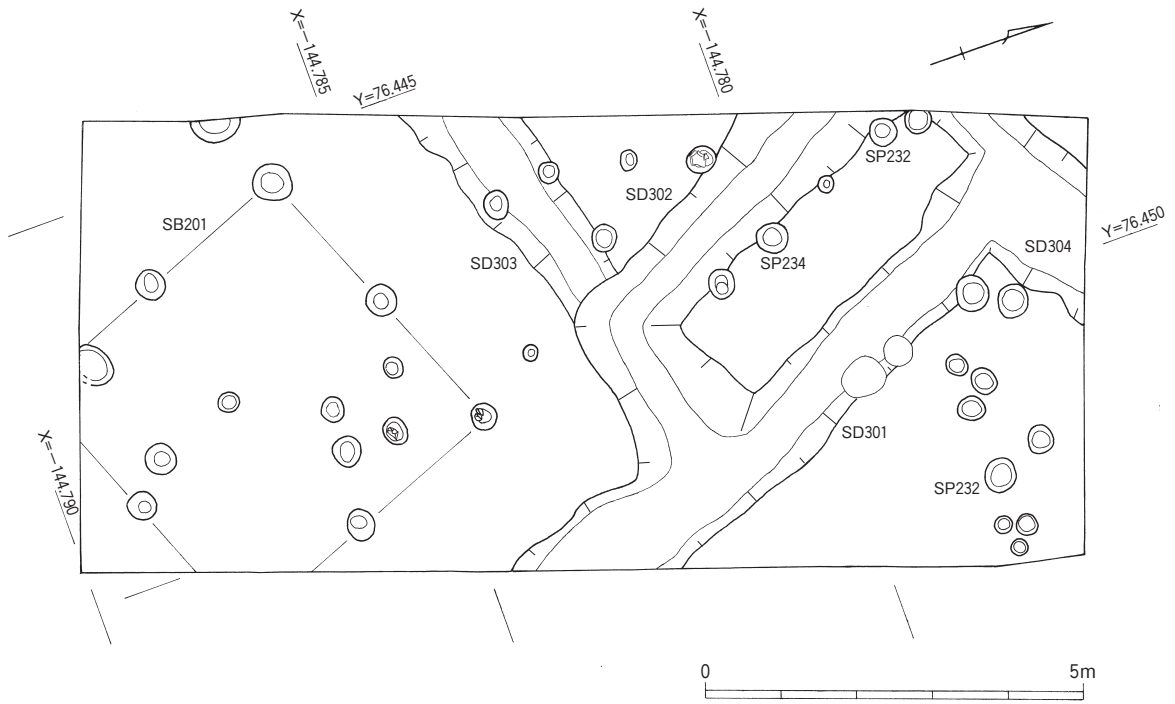
弥生時代の遺構面である。土坑や落ち込みを検出した。南半では、ベース層に拳大から人頭大の礫が露出している。これは土石流に起因するとみられる。また、平安時代中期の遺構も一部検出している。これは本来、第2遺構面に属すると考えられるものだが、別の遺構に切られていたなどの理由で検出できていなかったものである。

ピットSP404（第13図）

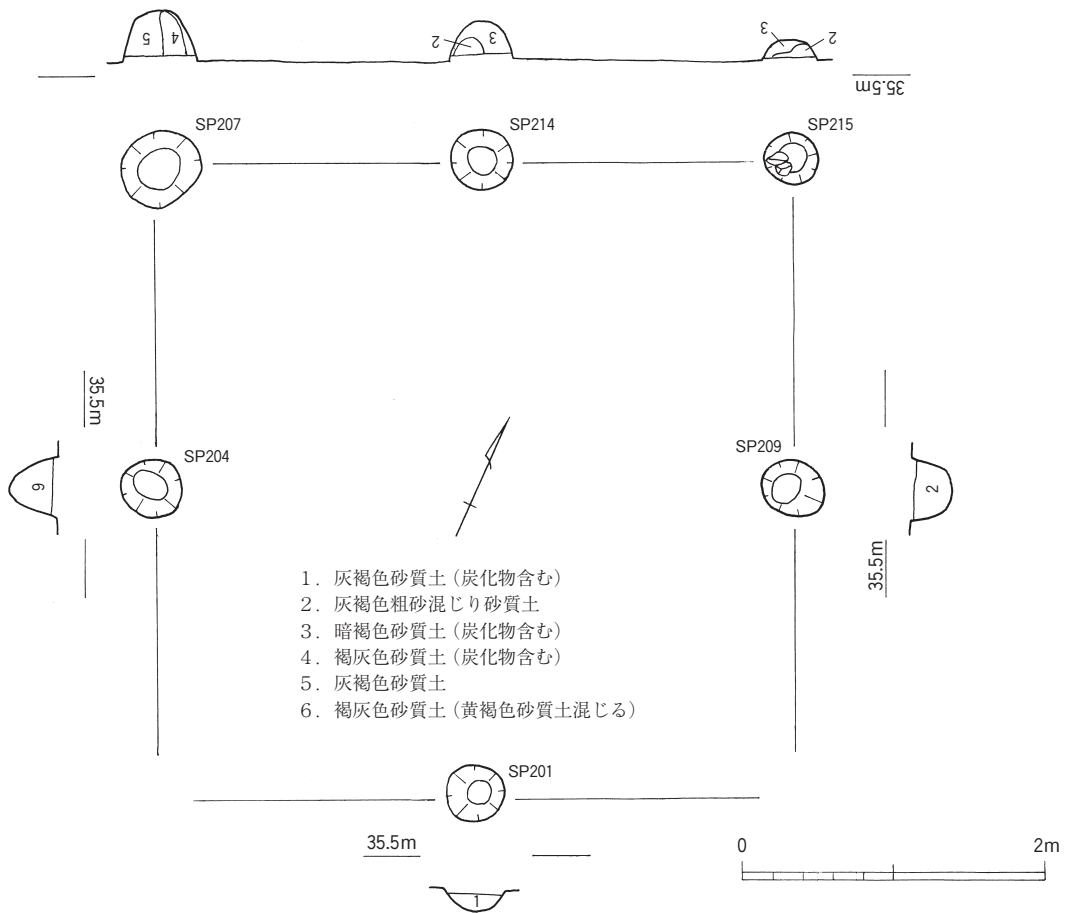
調査区北側において、SD301の下層で検出したピットである。直径0.25m、深さ0.2mを測る。ただし、遺構の上部はSD301により削平されているとみられる。埋土よりほぼ完形の須恵器碗が2点出土した。碗は、上下に半分ほど重なった状態で出土している。元々は入れ子状にして2枚が重ねられて置かれた可能性が高い。出土状況からみて、地鎮遺構であると考えられる。遺構の時期は11世紀後半である。

土坑SK401（第14図）

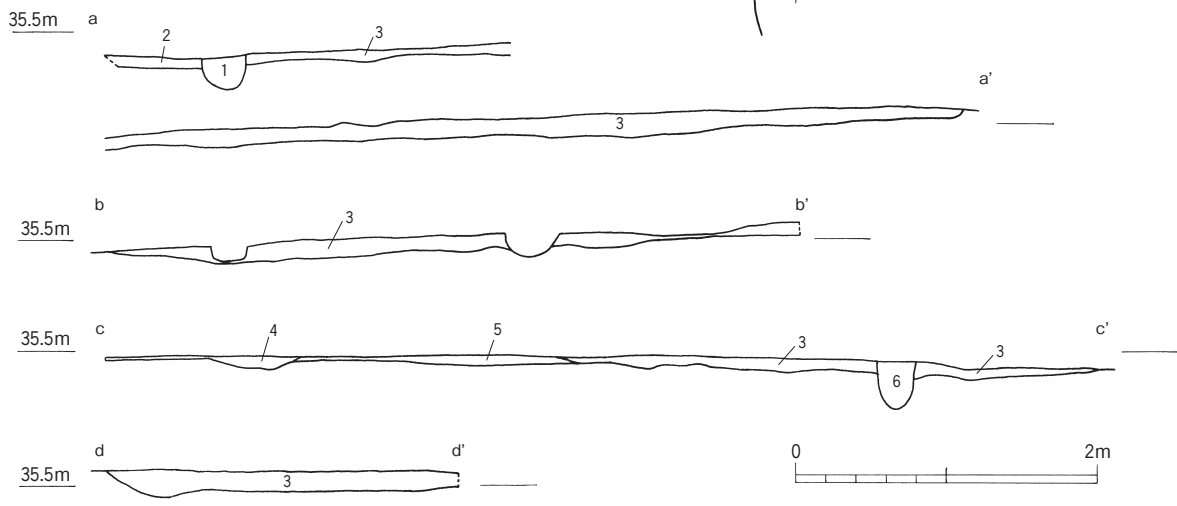
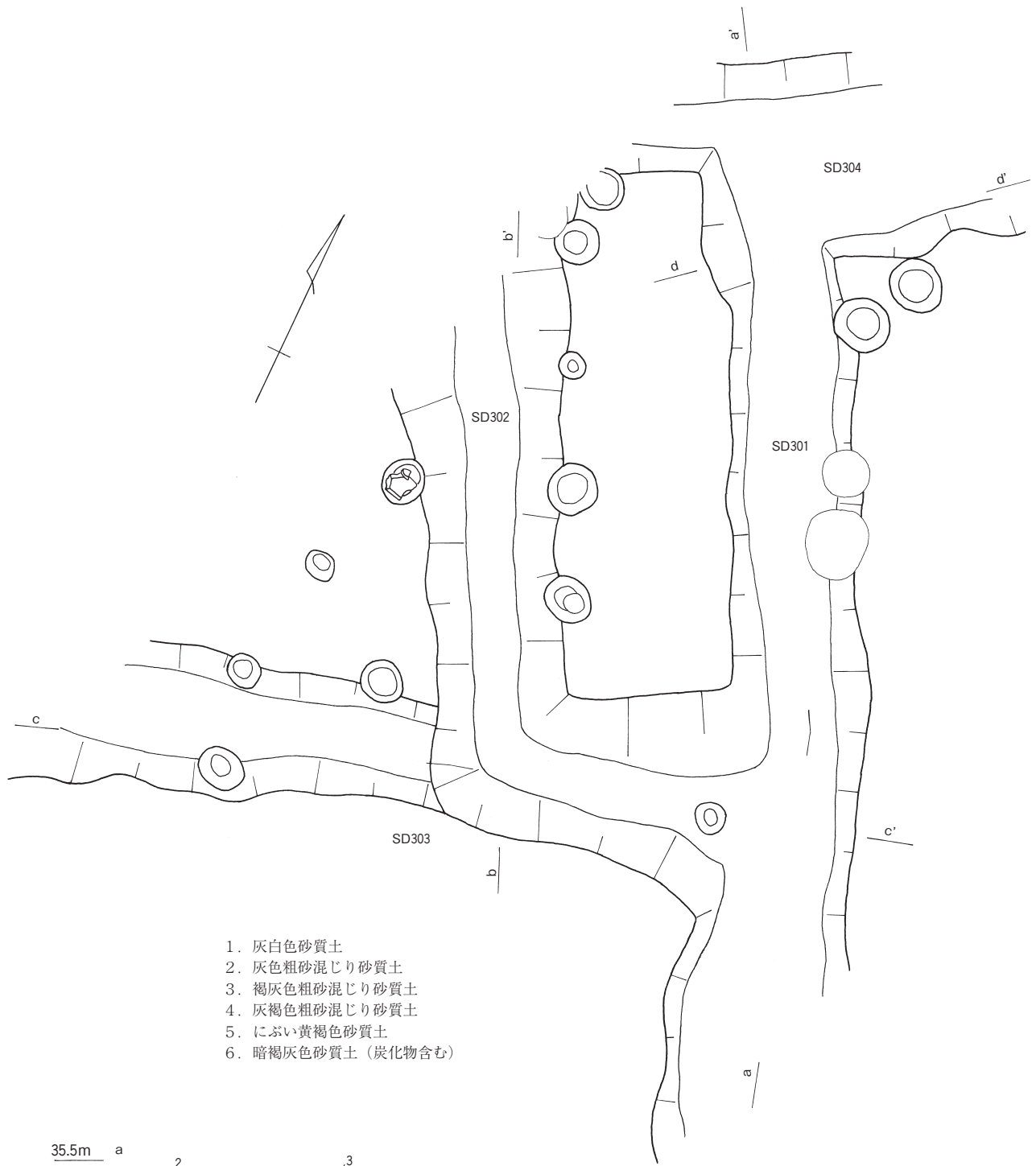
調査区南西端で検出した。東西約1.2m、南北1.0m以上、深さ約0.4mの土坑である。埋土には人頭大の礫が含まれている。調査区の端部で検出したため遺構の全容は不明であるが、掘り込みの状況などから墓壙の可能性もある。弥生土器がまとまって出土しているが、形を復元できる資料はそれほど多くない。遺構の時期は、弥生時代後期後半である。



第9図 1区第2遺構面平面図 (S=1:100)



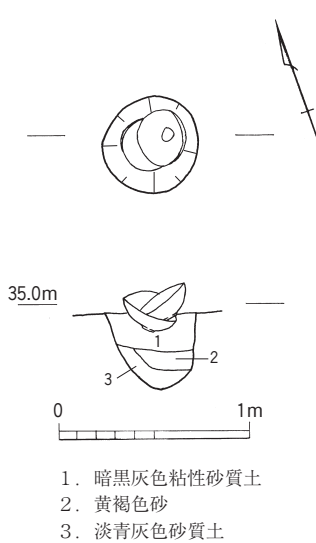
第10図 1区掘立柱建物SB201平面・断面図 (S=1:50)



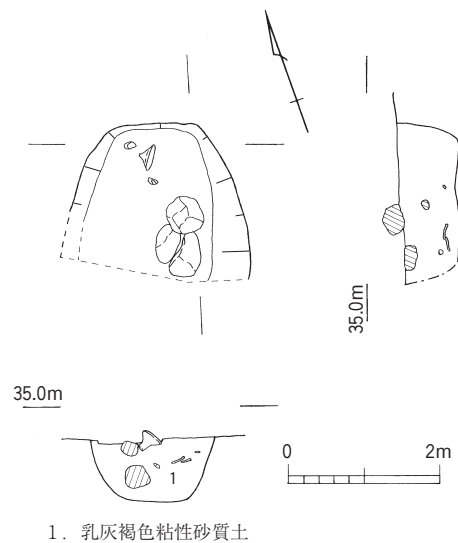
第11図 1区溝SD301~304平面・断面図 (S=1:50)



第12図 1区第3遺構面平面図 (S=1:100)



第13図 1区ピットSP404平面・断面図 (S=1:20)



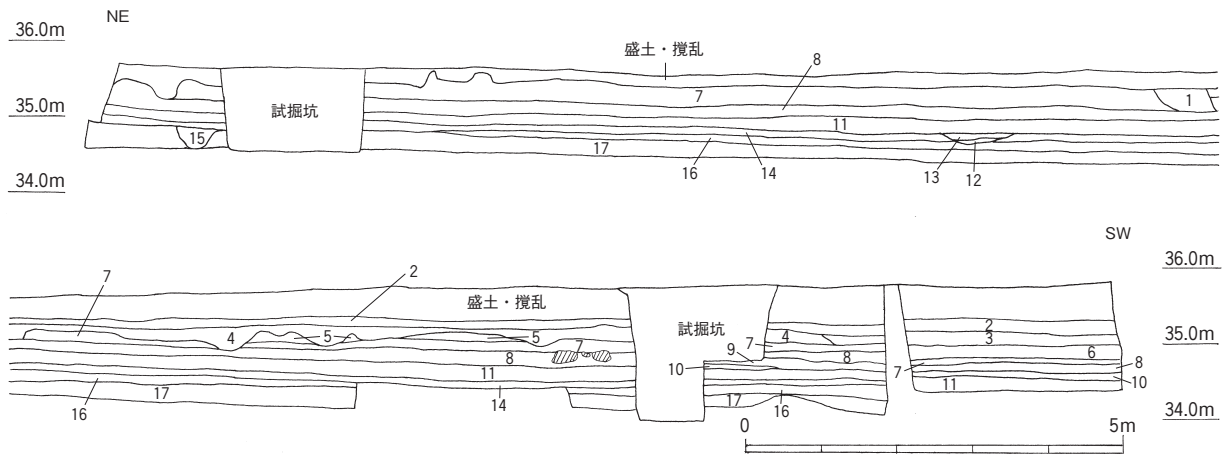
第14図 1区土坑SK401平面・断面図 (S=1:50)

第3節 2～4区の調査

(1) 基本層序 (第15図)

2～4区は細長い調査区であり、北東から南西に向かって傾斜がみられる。同一遺構面であっても、総じて北東のほうが南西より標高が高い。ここでは、3～4区南壁の土層断面を图示している。

現地表下約1.5～1.9mまでは盛土であり、この部分については、調査のはじめに重機で土砂を取り除いた。その下層には、旧耕土層や床土層が約0.5mにわたり堆積する。それらの層を除くと、遺物包含層である淡灰黄褐色粘性砂質土層が現れる。層厚は約0.2mである。その下層に淡



- | | | |
|--------------|----------------------|-----------------|
| 1. 淡褐色粘性砂質土 | 7. 乳黄褐色粘性砂質土 | 13. 灰白色シルト質極細砂 |
| 2. 暗緑灰色粘性砂質土 | 8. 淡灰黄褐色粘性砂質土(遺物包含層) | 14. 灰褐色粘性砂質土 |
| 3. 乳緑灰色粘性砂質土 | 9. 灰白色細砂～中砂 | 15. 暗褐灰色粘性砂質土 |
| 4. 乳青灰色粘質土 | 10. 淡黄灰色粘性砂質土 | 16. 褐灰色粘性砂質土 |
| 5. 乳褐色粘質土 | 11. 暗青灰色粘質土 | 17. 褐色粘性砂質土(地山) |
| 6. 淡緑灰色粘性砂質土 | 12. 乳灰色極細砂シルト | |

第15図 3・4区南壁土層断面図 (S=1:100)

暗青灰色粘質土が約0.2m堆積しており、その上面が第1遺構面となる。その下層には灰褐色粘性砂質土層が約0.1m堆積しており、その上面が第2遺構面となる。さらに下層には、遺物包含層である褐灰色粘性砂質土が堆積しており、褐色粘性砂質土上面が第3遺構面となる。各遺構面の標高は、第1遺構面が約34.7～35.1m、第2遺構面が約34.6～35.0m、第3遺構面が約34.2～34.6mである。ただし、2区の南西部はかなり落ち込んでおり、第3遺構面は約33.7m付近で検出している。

(2) 2～4区の遺構

①第1遺構面(第16図)

この遺構面では全体に遺構の密度は高くない。2区では石列や数条の溝を検出した。また、3区では石組みを検出した。4区では顕著な遺構は検出されなかった。

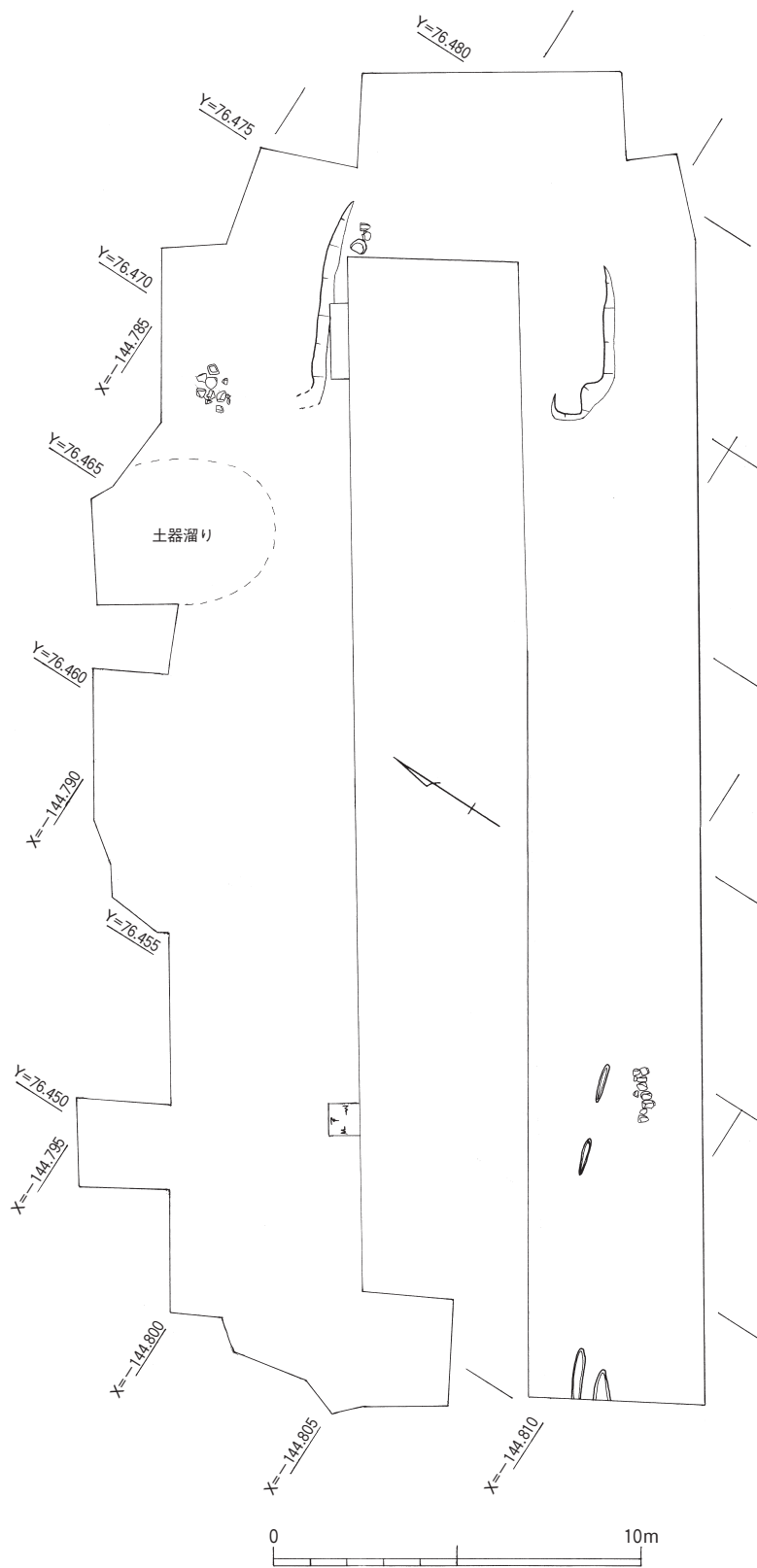
3区で検出した石組みは13次調査で検出した石組みの続きであるとみられる。13次調査ではこの石組みを池の西岸と報告している。ただ、今回の調査では、この石組みが東に連続することは確認されず、池の明確な輪郭も検出されなかった。よって、この石組みが池に伴うものであるかどうか判明するには至らなかった。

②第2遺構面(第17図)

平安時代中期～後期の遺構面である。2区の東半と3区において、溝、落ち込み、掘立柱建物、ピット群などの遺構を検出した。また4区では、耕作溝群を検出した。この耕作溝群からは遺物がほとんど出土しておらず、詳細な時期は不明である。

溝SR202・203・204(第16・17図)

調査区の中央部を北西から南東に走る溝である。幅は0.7～2.3m、深さは0.15mを測る。この溝より西半では遺構が希薄になることから、何らかの境界の役割を果たしていたと考えられる。また、1区で検出した溝SD301・SD302と方向が同じであることから、関連する遺構である可能性がある。遺構の時期は、11世紀後半である。



第16図 2～4区第1遺構面平面図 (S=1:200)



第17図 2～4区第2遺構面平面図 (S=1:200)

ピット群 (第18・19図)

調査区東半で多数のピットを検出した。ピットの規模は、直径0.2~0.4m、深さ0.15~0.4mのものが多い。柱痕を持つピットも多く検出しており、複数の掘立柱建物が存在したことをうかがわせるが、建物を復元できたのは後述する2区の2棟のみである。

また、ピットから出土している土器の年代には幅があり、大きくは11世紀後半と12世紀後葉にわかれる。2区では基本的に12世紀後葉のピットが集中しており、わずかに11世紀後半のピットも存在する。一方、3区では11世紀後半のピットが集中しており、12世紀後葉のピットはひとつもない。なお、半数以上のピットは、遺物が全く出土していないか、細片しか出土しておらず時期が特定できないものである。

2区掘立柱建物SB202 (第20図)

2区の東部で検出した掘立柱建物である。柱穴は3間×1間を検出したが、建物は調査区外へ続く可能性がある。柱穴は直径0.4~0.5m前後、深さ0.3~0.6m前後である。建物の方向はN33°Wで、柱間の間隔は東西が約1.9m、南北が約2.2mである。出土遺物は細片が中心であるが、須恵器壺や土師器皿が出土している。遺構の時期は、12世紀後葉と考えられる。

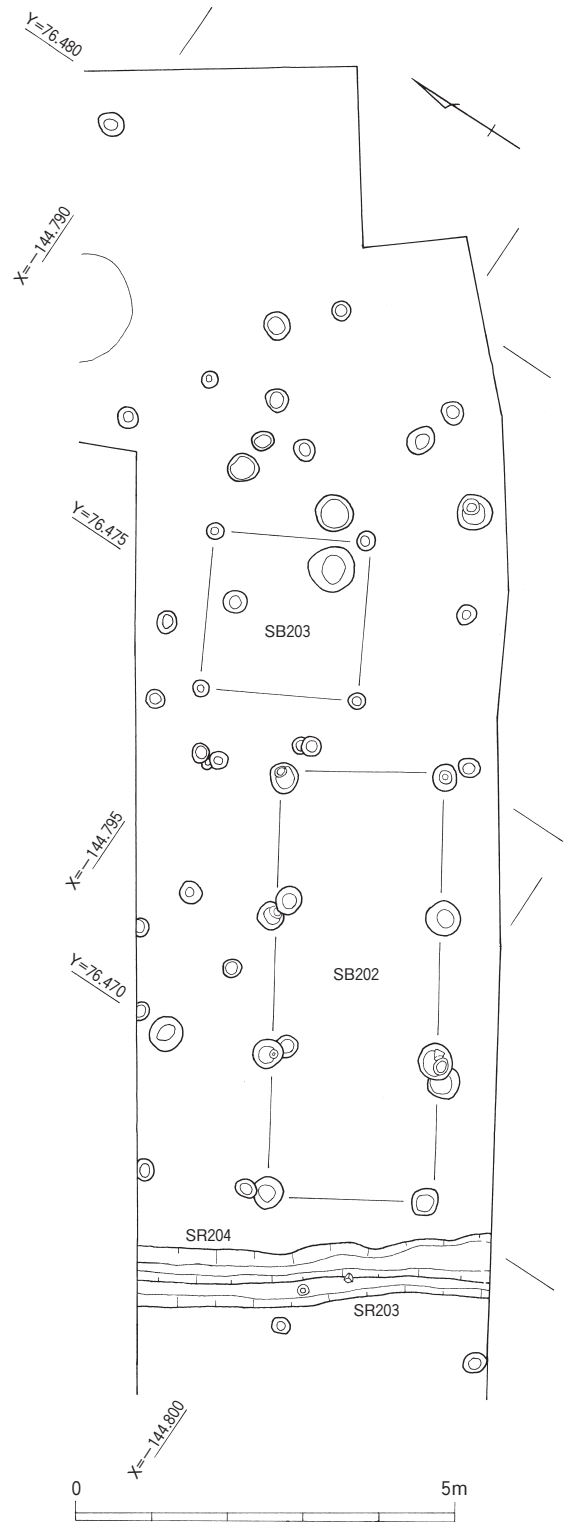
2区掘立柱建物SB203 (第21図)

SB202のすぐ北東側で検出した。建物は1間×1間を検出したが、さらに調査区外へ続く可能性がある。方向はN29°Wで、柱間の間隔はいずれも約2.1mである。柱穴は直径0.25m前後、深さは0.2m前後である。出土遺物が少なく遺構の時期は決定しがたいが、周囲の遺構の時期と同じく、12世紀後葉の可能性が高い。

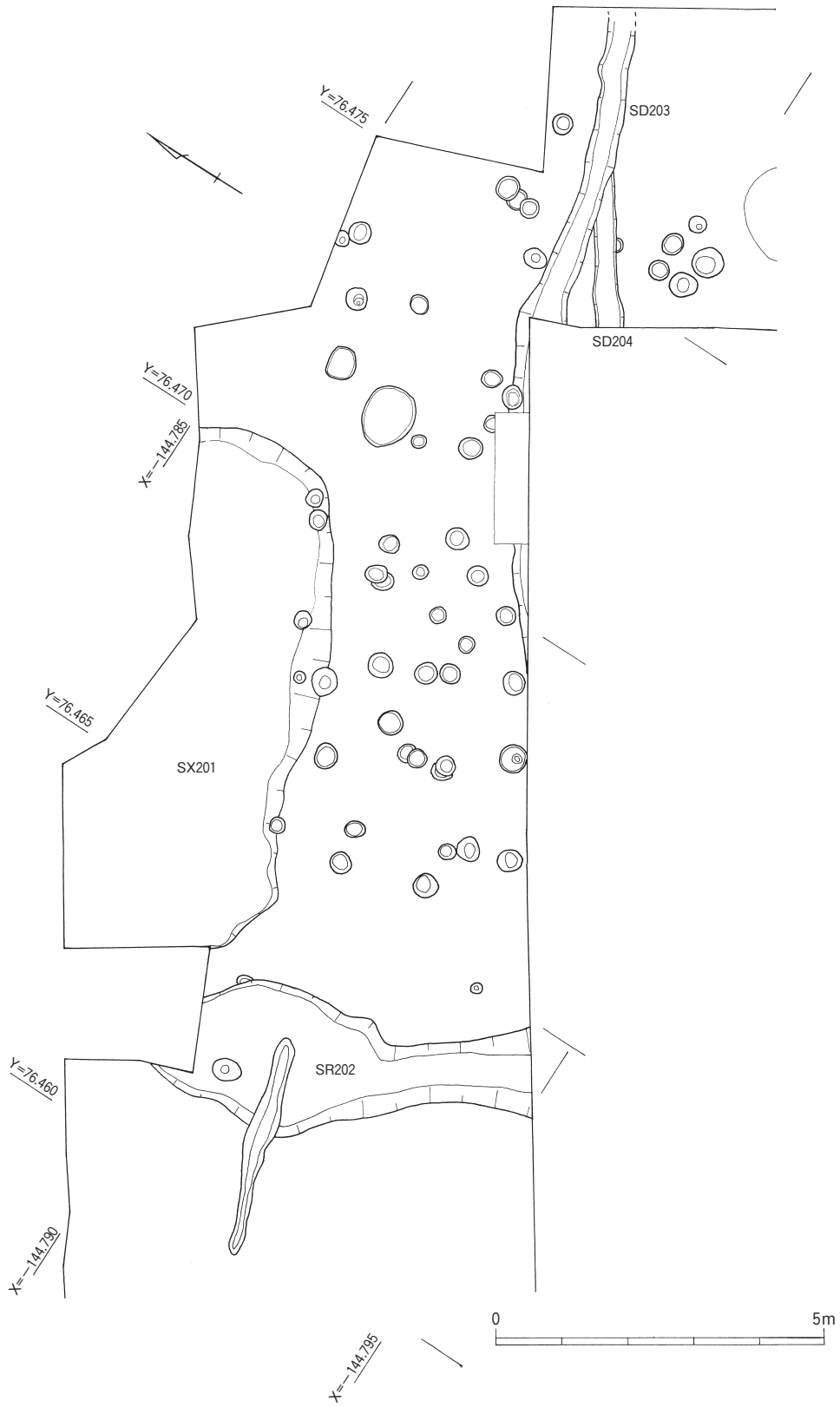
3区落ち込みSX201 (第22図)

3区北西部で検出した。遺構の全容は調査区外へ続いているため不明であるが、東西8m以上、南北4m以上、深さ0.15m前後の不定形な落ち込みである。埋土からは多量の礫と土器類が出土している。

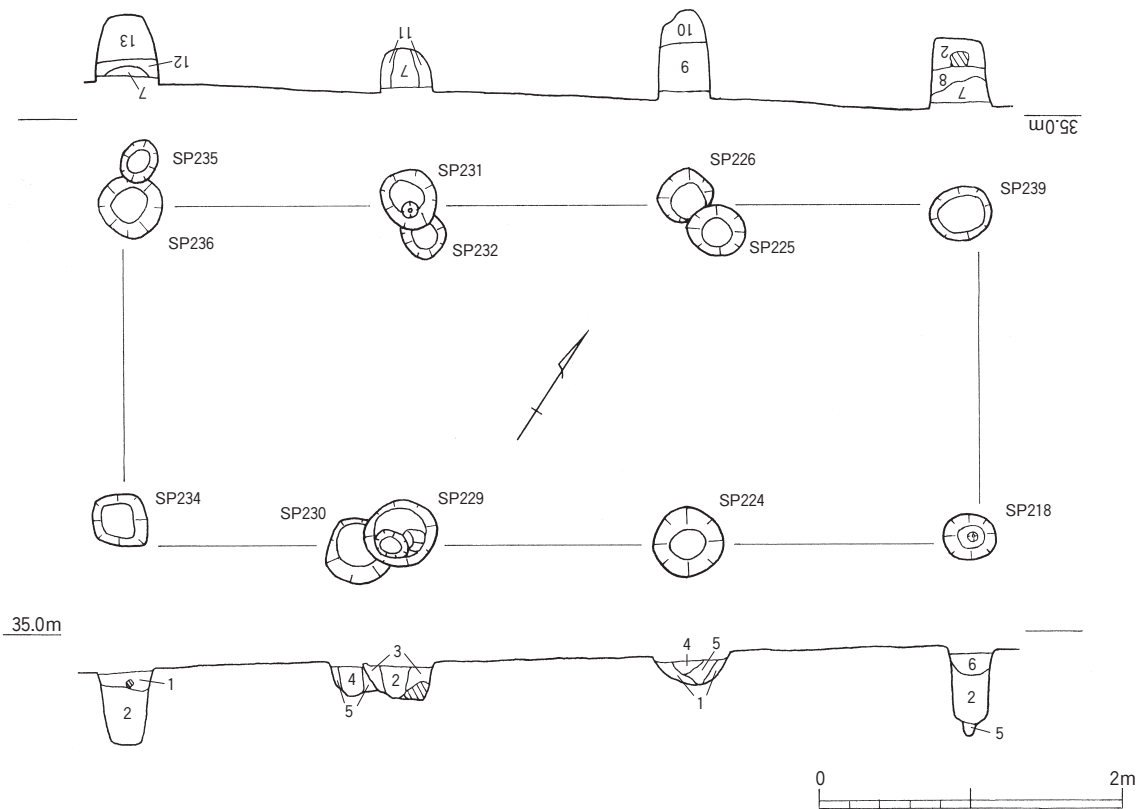
礫は0.2~0.3m前後の人頭大のものも多く、いずれも角張っている。礫はある程度集中している部分が認められるが、積み上げられたりした状態では出土しておらず、石組などの構造物はなかったと考えられる。



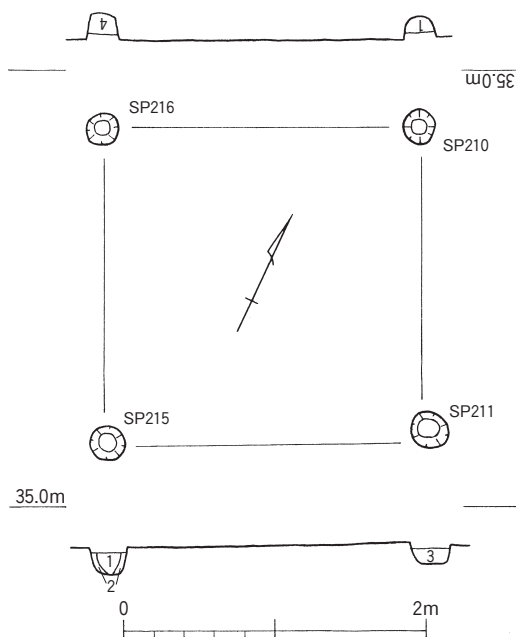
第18図 2区第2遺構面平面図 (S=1:100)



第19図 3・4区第2遺構面平面図 (S=1:100)



第20图 2区掘立柱建物SB202平面・断面図 (S=1:50)



SB202

1. 灰褐色粘性砂質土
2. 乳灰褐色粘性砂質土
3. 乳黄褐色粘性砂質土
4. 淡黄褐色粘性砂質土
5. 淡灰褐色粘性砂質土
6. 淡青褐色粘性砂質土
7. 灰黄褐色粘性砂質土
8. 淡灰黄色粘性砂質土
9. 淡褐色粘性砂質土
10. 黄褐色粘質土
11. 灰黄色粘性砂質土
12. 黄灰色粘性砂質土
13. 淡灰色粘質土

SB203

1. 灰褐色粘性砂質土
2. 暗褐色粗砂混じり粘性砂質土
3. 黑褐色粘性砂質土
4. 暗褐色粘性砂質土

第21图 2区掘立柱建物SB203平面・断面図 (S=1:50)

土器類は土師器皿、黒色土器碗、須恵器碗・甕などが出土している。黒色土器碗が多く出土しているのが特徴的である。また、須恵器甕も破片ばかりであるが、複数個体出土しているのが確認できる。これらの土器は、遺構の底からは浮いた状態で出土しているが、近似したレベルに集中して出土している。また、平面的には、礫と礫の間から出土しているものが多く、いくつかの土器が重なっている状態もみられた。

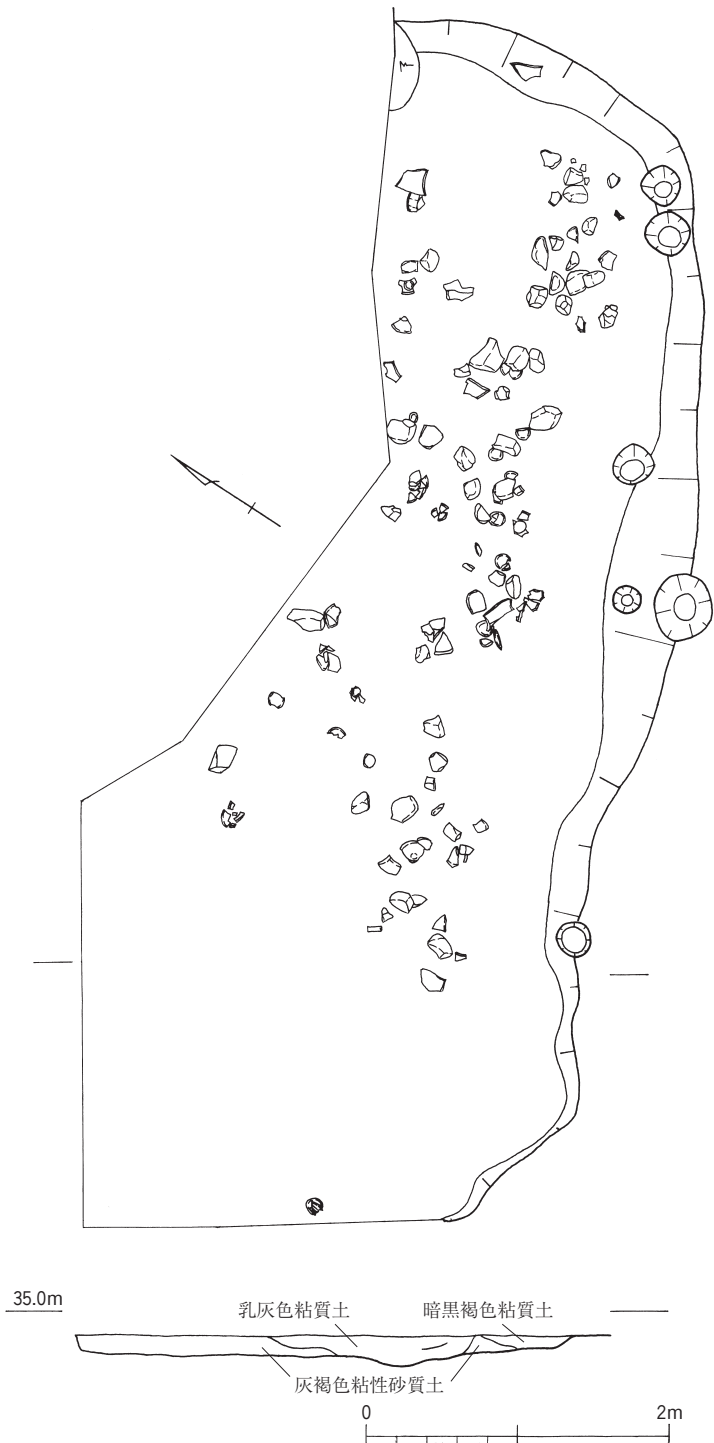
出土状況から考えて、これらの遺物は遺構が埋没する過程で、比較的短期間に投棄されたと考えられる。礫の性格については判然としないものの、土器類と同じくして投棄されたとみられる。遺構の時期については、10世紀末から11世紀初頭の年代が与えられる。出土遺物は一括性が高いと考えられる。

③第3遺構面（第23図）

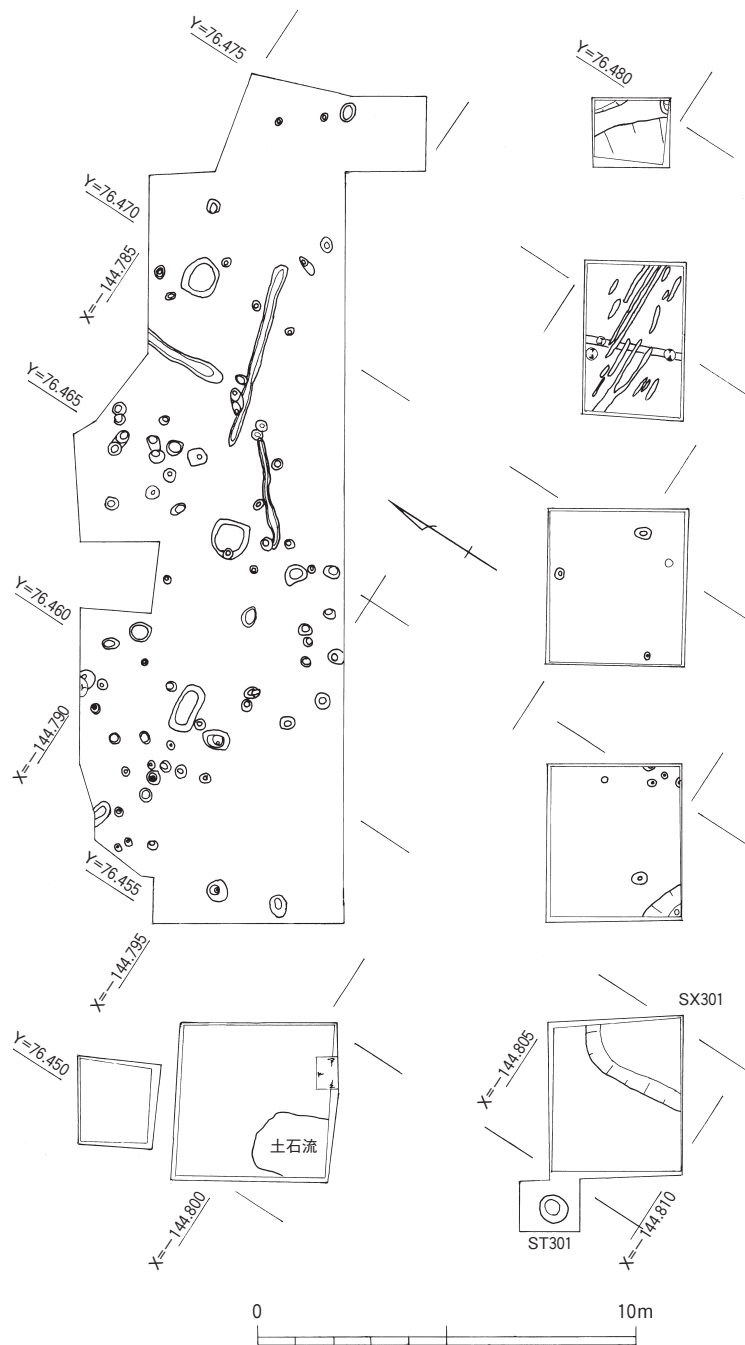
弥生時代の遺構面である。2-1区では土器棺墓や落ち込みに伴う土器溜りを検出した。2-2区・2-3区・2-4区・3-7区・4-5区・4-6区ではピットや溝、落ち込みなどを検出したが、いずれも遺物がわずかであるので、詳細な時期は不明である。また、4-8区では多数の土坑を検出した。

2-1区土器棺墓ST301（第24図）

2区南西端で検出した広口壺が納められた土坑である。遺構の規模は直径約0.8m、深さ約0.35mであり、器高・胴径ともに約0.4mの大型の広口壺が横たえられた状態で埋められていた。壺は口縁部を打ち欠いており、その破片で胴部を閉塞していた。土器の内側には土が詰まっており、骨などは見つからなかった。



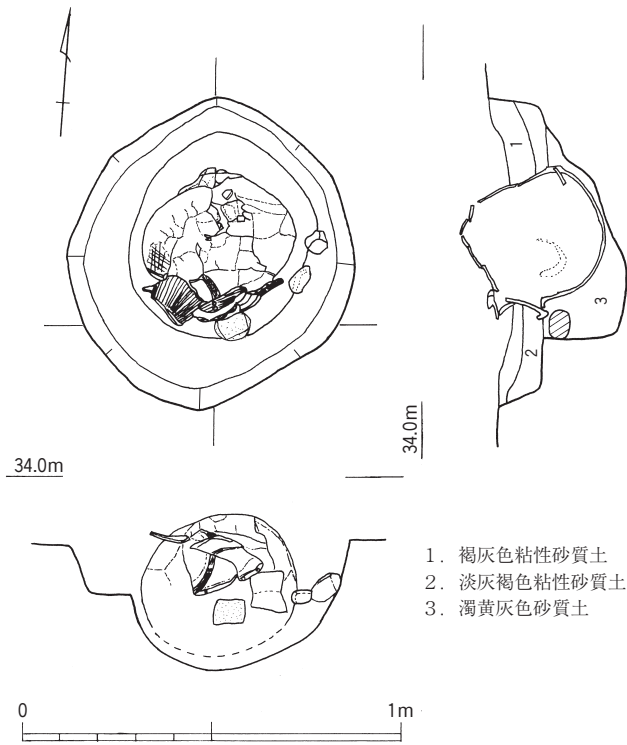
第22図 3区落ち込みSX201遺物出土状況・断面図 (S=1:50)



第23図 2～4区第3遺構面平面図 (S=1:200)

2-1・2-2区落ち込みSX301 (第25・26図)

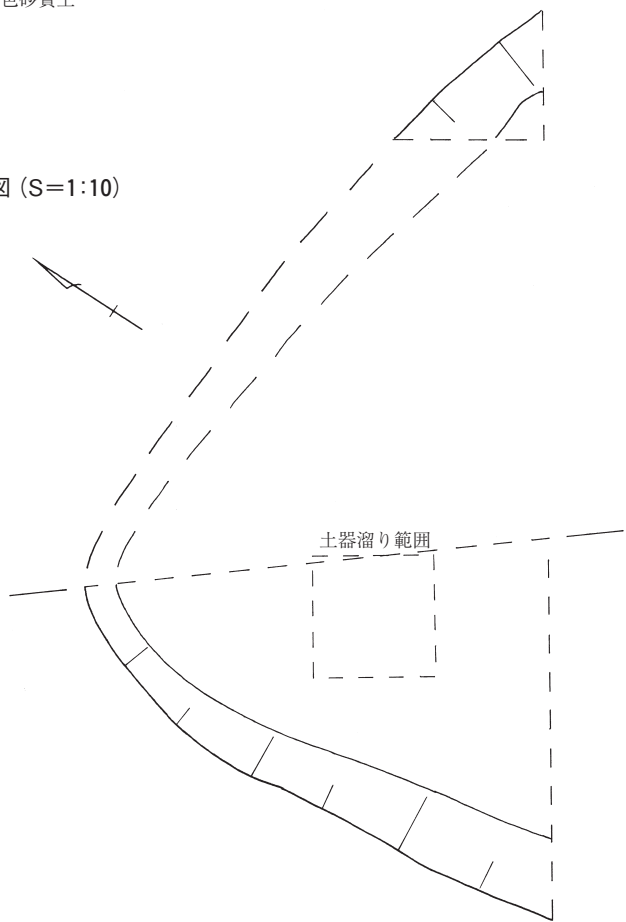
土器棺墓ST301の5mほど東で検出した不定形な落ち込みである。遺構の全容は調査区外へ続くため不明であるが、一辺5m以上はあるとみられる。深さは約0.5mを測る。埋土中に土器溜りを検出した。0.8m四方の範囲に多くの土器片が集中していた。土器はほとんどが破片の状態で出土しているが、接合すると多数の土器が復元可能であった。このことから、割れた土器、もしくは割られた土器がこの場所にまとめて遺棄されたものと考えられる。



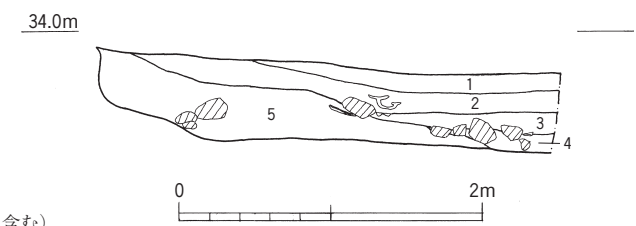
第24図 2-1区土器棺墓ST301平面・立面・断面図 (S=1:10)



第26図 2-1・2区落ち込みSX301
土器出土状況図 (S=1:10)



1. 淡褐色粘性砂質土
2. 濁黄褐色粘質土
3. 乳灰褐色粘質土
4. 淡黄褐色粘質土
5. 墨灰色粘性砂質土 (炭化物多く含む)



第25図 2-1・2区落ち込みSX301平面・断面図 (S=1:20)

また、土器溜りは落ち込みの中層付近で見つかり、落ち込みが埋没する途中の段階で遺棄されたものと考えられる。出土遺物には、弥生土器甕・鉢・高坏・ミニチュア土器などがある。

出土している土器から、弥生時代後期後半の遺構であることがわかる。

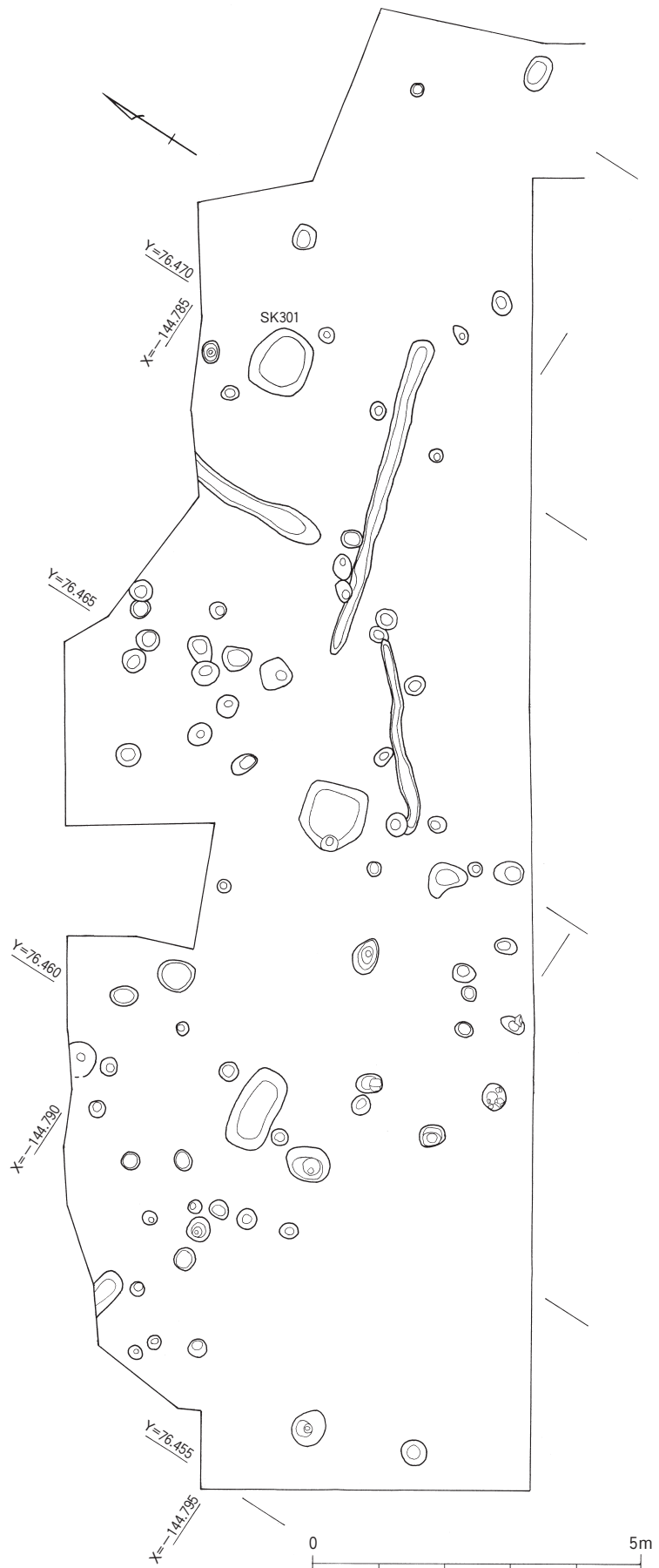
3・4-8区遺構群(第27図)

多数の土坑や溝を検出した。土坑は直径0.2~0.4m、深さ0.1~0.3mのものが多いが、それより規模が大きなものもみられる。溝については、幅0.2~0.3m、深さは0.1m程であり、ごく浅いものである。

これらの遺構のうち、遺物が出土しているものは約半数である。まとめて遺物が出土しているものはなく、いずれも細片が出土しているのみである。遺物は土坑SK301出土の1点を除き、すべて弥生土器である。

遺構の輪郭も不明瞭なものが多く、明らかに人為的に形成されたと判断できるものは少ない。

落ち込みSX201の下層で検出した土坑SK301からは、土師器皿が1点出土しており、この遺構のみが平安時代に属すると考えられる。SK301は一辺約1m、深さ約0.2mの隅丸方形土坑である。土師器皿以外の遺物は皆無であった。



第27図 3・4-8区 第3遺構面平面図(S=1:100)

第4節 出土遺物

今回の調査では、28リットルコンテナに換算すると27箱分の遺物が出土した。出土遺物は弥生土器と平安時代の土器が大半を占めており、それ以外の時代の遺物は非常に少ない。また、土器以外の遺物はほとんど出土していない。とくに、周辺の調査では瓦の出土が多数報告されているが、今回の調査ではほぼ皆無に近い出土状況であった。

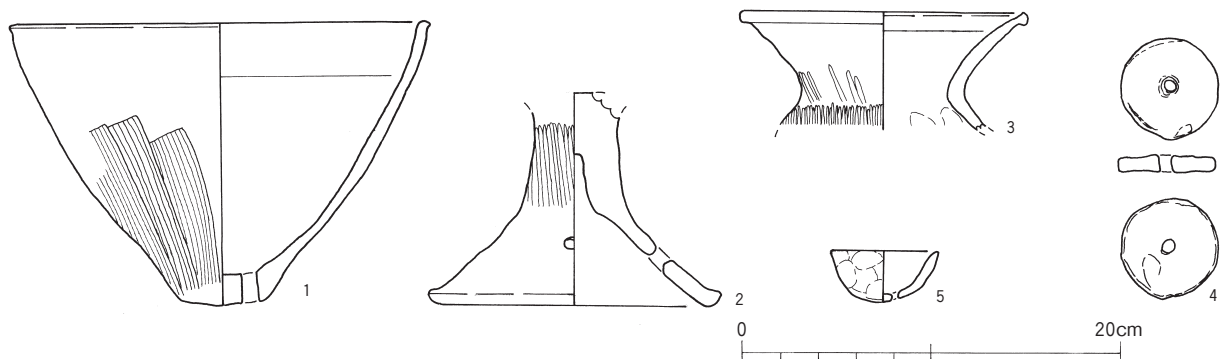
(1) 弥生時代の遺物

1区土坑SK401出土遺物(第28図)

1は弥生土器鉢である。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。外面にはタテ方向のハケメが施される。底部には3つの孔が穿かれている。2は高坏である。脚部は、上半部はほぼ垂直に立ち上がり、下半部は外折して広がる。裾部は丸く収めている。透かし孔が4つある。上半部外面にはタテ方向の細かなヘラミガキが施されている。上半部は棒状の道具に粘土を張り付けてゆき、最後に棒を抜いて成形したと考えられる。3は短頸壺である。頸部は外側に緩やかに開き、口縁部は玉縁状に収める。体部外面にはタテ方向の細かなヘラミガキが施される。SK401から出土した遺物の時期については、概ね弥生時代後期後半である。

1区その他の遺物(第28図)

4は紡錘車である。落ち込みSX401から出土している。直径約5cm、厚さ約8mmで、中央に直径約6mmの孔が穿かれている。5は鉢型のミニチュア土器である。包含層から出土している。内外面にユビオサエの跡が残る。底部には孔が穿かれている。

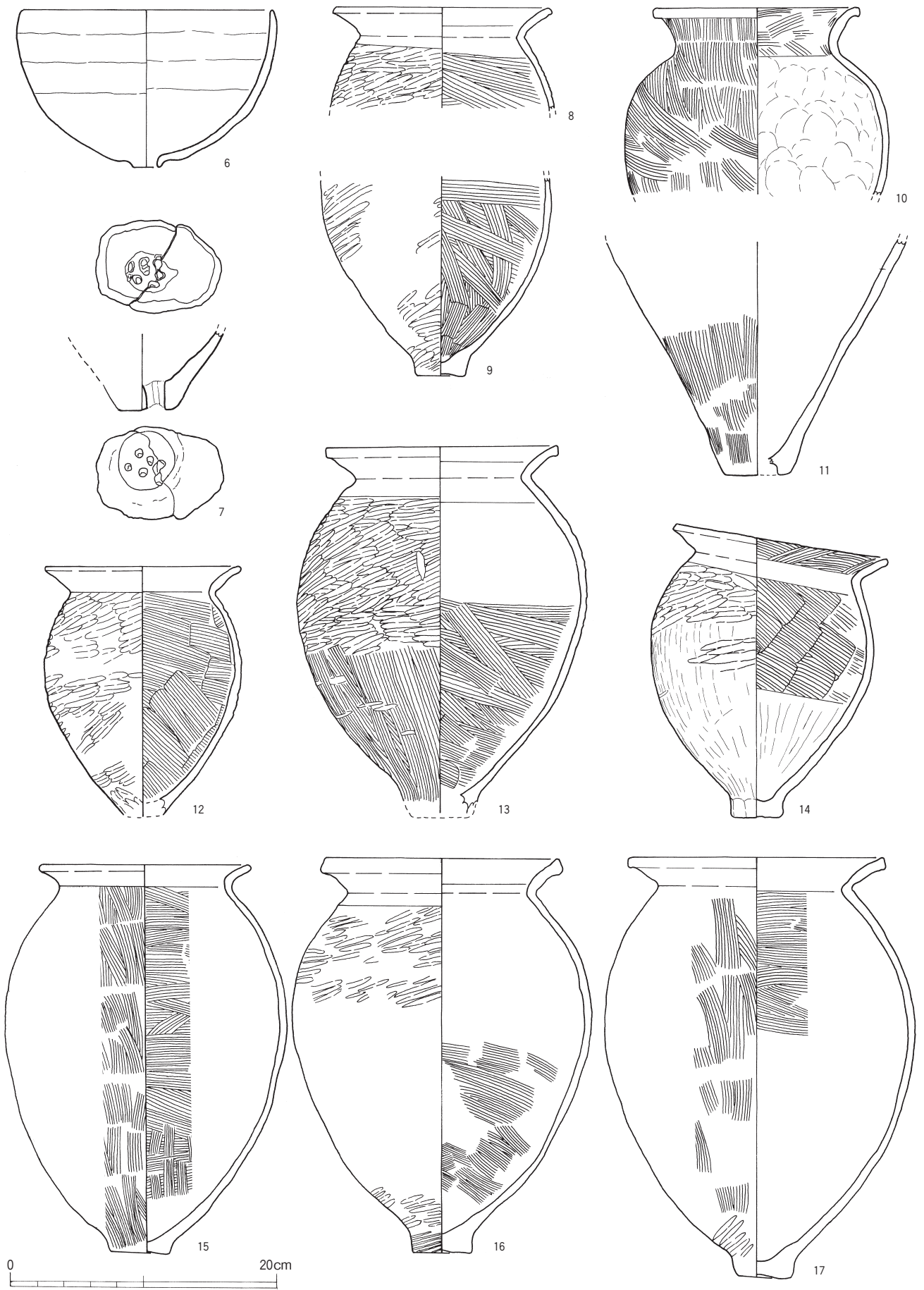


第28図 1区土坑SK401・その他出土遺物(S=1:4)

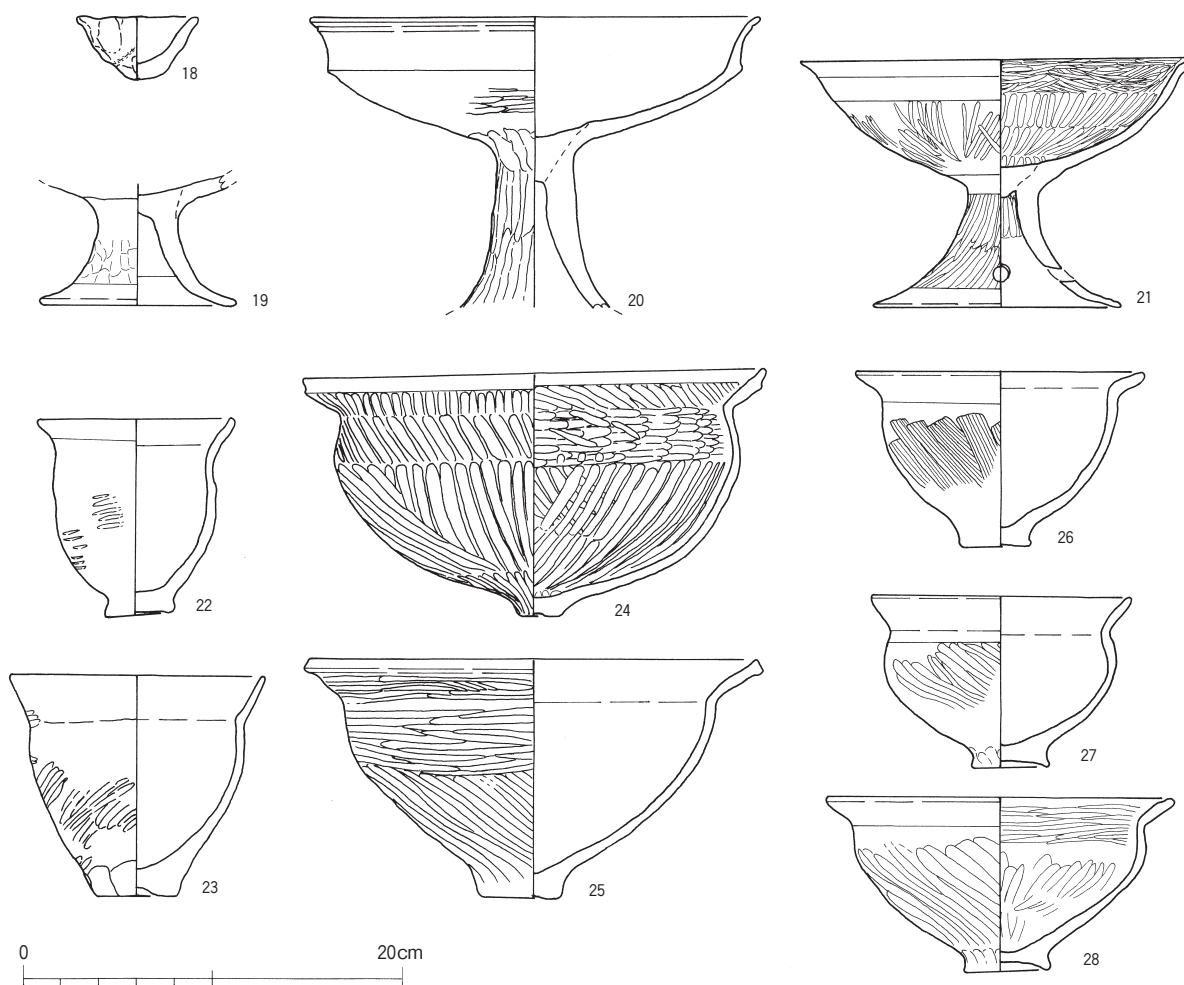
2区落ち込みSX301出土遺物(第29・30図)

6は有孔鉢である。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はやや内弯する。内外面には粘土紐を接合した痕跡がみられる。7は鉢である。底部に穿孔がみられる。孔は7つ空いており、底から見ると三角形になるように配置されている。

8・9・11~17は甕である。8は上半分が残存する。内弯して立ち上がった体部が頸部で外折し、口縁部に直線的に延びる。口縁部にはヨコナデを施す。体部内面にはヨコ方向のハケメが施されており、体部外面にはタタキが残る。9は下半分が残存する。体部内面には縦横のハケメが施される。体部外面にはタタキが一部に残る。10は広口壺である。体部は丸みをもって立ち上がり、頸部で外反し口縁部は丸く収める。体部から口頸部外面にはハケメが施される。口頸部内面にはハケメが残り、体部内面にはユビオサエの跡が残っている。11は甕とみられる。体部が直線的に立ち上がり、体部外面には縦方向のハケメが施される。古手の混入か。12はや



第29図 2-1区落ち込みSX301出土遺物(1) (S=1:4)

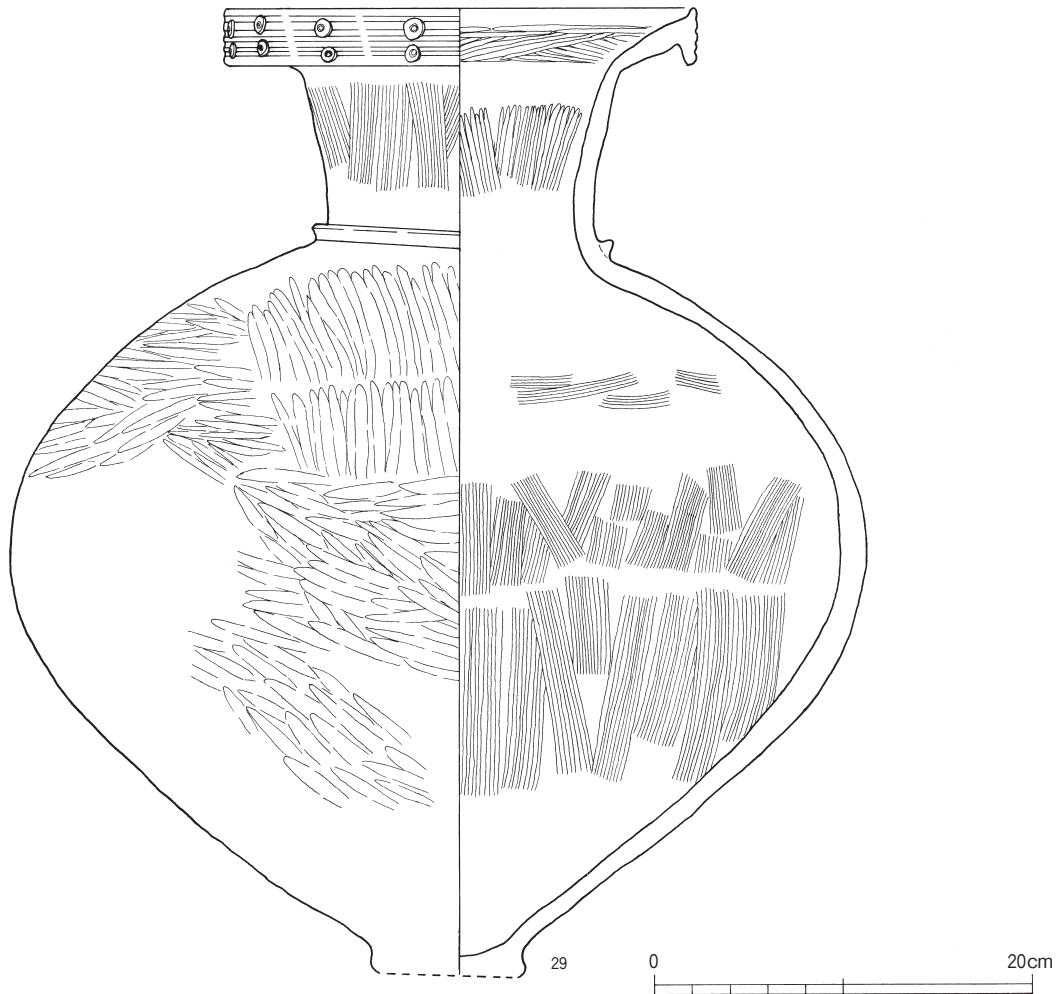


第30図 2-1区落ち込みSX301出土遺物(2) (S=1:4)

や小型の個体である。体部内面にはハケメ、体部外面にはタタキが残る。13は体部内面下半にハケメが残っている。体部外面はタタキが施された後に、下半部には縦方向のハケメを施している。14はやや小型の個体で、歪んでいる。口頸部は外折して直線的に延びており、口縁端部は丸く収める。体部内面は、上半には横方向にハケメが施されている。また、口頸部内面にもハケメが施されている。体部外面は上半にタタキが残る。下半には縦方向に道具でナデを施している。15は緩やかに体部が立ち上がり、頸部で外反し、短く口縁部を収める。全体的に薄手である。体部には内外面にハケメが施されており、内面は主に横方向、外面は縦方向のハケメである。16は体部が緩やかに内湾して立ち上がり、頸部で外折して口縁部へ短く直線的に延びる。口縁端部は少し厚みがあり、面を持つ。体部内面の下半にはハケメが施されている。体部外面には一部にタタキが残る。17は緩やかに内湾した体部が頸部で外折し、口縁部に短く直線的に延びる。口縁端部は面を持っている。体部内面の上半には横方向にハケメが施されている。体部外面はタタキを施した後、縦方向にハケメを施す。

18は鉢形のミニチュア土器である。外面にユビオサエの跡が残る。

19~21は高坏である。19は脚部が残存する。脚は裾に向かって緩やかに外反して広がっていき、裾端部は丸く収める。20は有稜高坏で、脚裾部は欠損している。坏部はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部で外折して口縁端部に向かって薄く収める。脚部はやや外反して広がる。脚部外面にはケズリが施されている。21は外反口縁高坏である。脚部では、脚柱部から脚裾部に



第31図 2-1区土器棺墓ST301出土遺物 (S=1:4)

かけて緩やかに外反する。脚裾部は器壁が薄くなる。透かし孔は4ヶ所開いている。坏部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反させる。脚部外面には縦方向に丁寧なヘラミガキが施され、脚裾部はヨコナデがされている。坏部内面には縦方向の丁寧なヘラミガキが施されるが、口縁部付近は細かな横方向のヘラミガキとなる。坏部外面には下半にヘラミガキが施されている。

22・23は小型の甕である。22は体部が緩やかに立ち上がり、口縁部は外反させて丸く収める。全体に磨滅が激しいが、体部外面にはわずかにタタキが残る。口縁部はヨコナデによって仕上げている。23は緩やかに体部が立ち上がり、口縁部は外折して直線的に延びる。外面は底部をユビオサエし、体部にはタタキが施される。口縁部はヨコナデで調整される。

24～28は外反口縁鉢である。24は中型の鉢で、やや扁平な形をしている。丸みを帯びた体部に外折して口縁部が付く。口縁部は直線的で、端部はヨコナデによって調整されて面を持つ。内外面には丁寧にヘラミガキが施されている。25も中型の鉢である。24に比べてやや直線的に体部が立ち上がる。口縁部は外折して直線的に伸びる。端部はヨコナデで調整されて面を持つ。外面にはヘラミガキが施されている。下半は縦方向に、上半は横方向にヘラミガキされる。

26～28は小型の鉢である。いずれも体部が緩やかに立ち上がり、口縁部は外折して短く伸びる。26は体部外面に縦方向のハケメが施される。27は体部外面に丁寧なヘラミガキが施される。28はやや扁平な形をしており、内外面にヘラミガキが施される。

SX301から出土した遺物の年代については、概ね弥生時代後期後半におさまる。

2区土器棺墓ST301出土遺物(第31図)

29は広口壺である。底部や肩部に対して胴部が張り出しており、扁平な形態となっている。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は外側に開く。肩部と頸部の境には突帯が貼り付けられている。口縁部には装飾が施されている。体部外面はヘラケズリによって調整されており、体部内面には縦方向のケズリがみられる。

(2) 平安時代の遺物

1区溝SD301～304出土遺物(第32図)

30～43はSD301、44～50はSD302、51～57はSD303、58はSD304から出土した土器である。

31・32・34～36はロクロ成形の土師器皿である。31は体部が内湾して立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。底部外面の切り離しは不明瞭ながら、回転ヘラ切りとみられる。見込みはドーナツ状に少し窪む。32は体部を外側に引き出して成形し、口縁部はそのままおさめる。底部の切り離しは静止ヘラ切りである。34はやや内湾して体部が立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。底部外面には回転糸切り痕がみられる。また、見込みには窪みがある。35は体部が直線的に立ち上がり、口縁部もそのまま丸くおさめる。底部外面には不明瞭ながらも、回転糸切り痕が残っている。36は体部が直線的に立ち上がり、途中で屈曲し、口縁部はそのままおさめる。底部の切り離しは回転ヘラ切りと思われるが、不明瞭である。見込みは圏線状に窪んでいる。胎土は粗雑で、焼成にもムラがある。

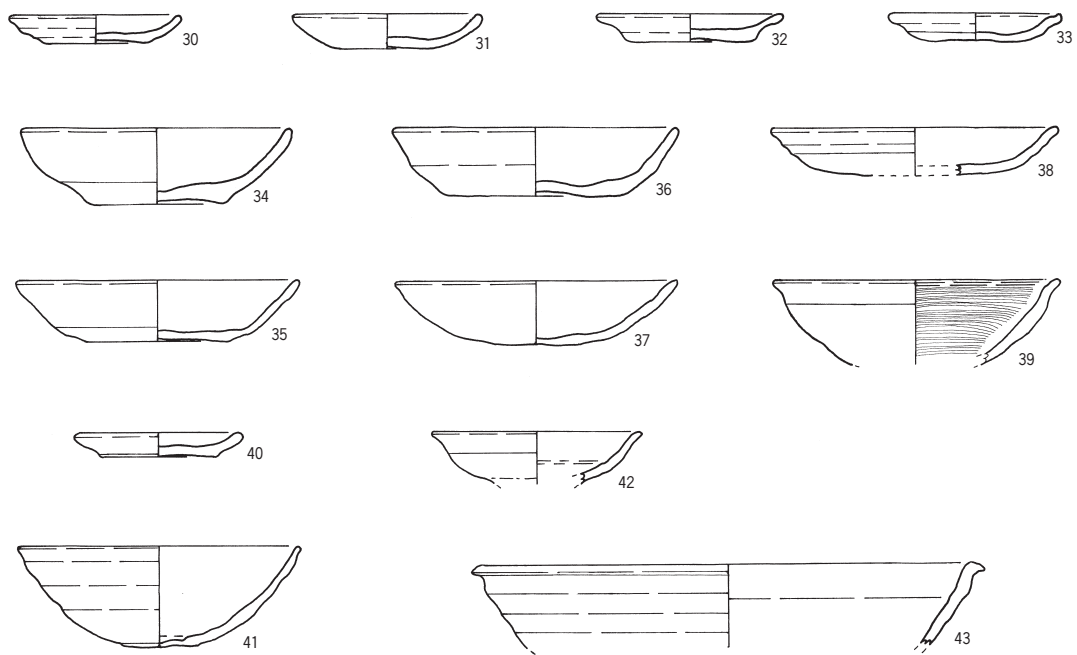
33・37・38は手づくねの土師器皿である。33はての字形の小皿である。やや厚手化がみられる。精良な胎土で丁寧に作られており、見込みにはナデを施す。口径は9cmである。37は体部が直線的に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。体部外面下半から底部にかけて、ユビオサエによって凹凸がみられる。また、見込みの周辺部にもユビオサエが残り、たどたどしい印象を受ける。胎土も粗雑である。39は瓦器埴である。内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は少し外反する。口縁端部内面に沈線がみられる。表面が磨滅しており、内面には緻密なヘラミガキが確認できるが、外面は確認できない。大和型である。

30・40は須恵器皿である。いずれの個体も体部は短く直線的に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。底部外面には回転糸切り痕がみられる。30は体部外面にヘラケズリの調整が明瞭に残る。また、焼成不良であり、色調は土師器に近い。41は須恵器埴である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は少し外反する。底部の平高台は非常に低く、段差が明瞭ではない。見込みには窪みがみられる。全体に薄手である。また、焼成が悪く磨滅が激しい。43は須恵器鉢である。口縁端部を外側につまみ出して突出させている。その下側はナデによって窪んでいる。よく焼成されており、黒灰色を呈する。

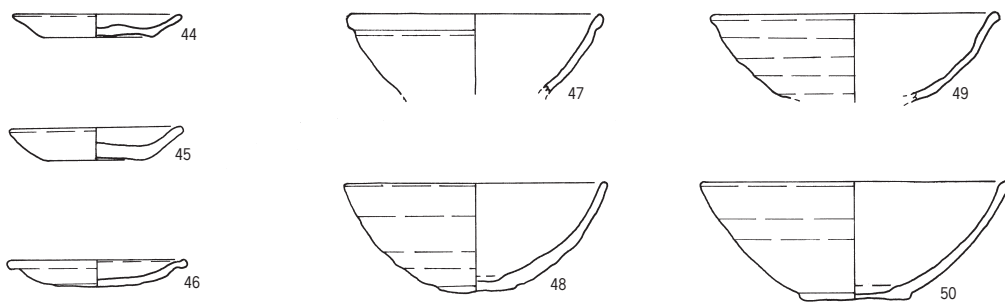
42は白磁皿である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。見込みには圏線が巡る。胎土は白色で、黒色粒が混じる。釉薬はやや青みがかかった白色で、濁っている。薄く施釉されており、体部下半は露胎である。大宰府分類では、白磁皿V類である。

44・45はロクロ成形土師器皿である。44は外反ぎみに立ち上がり、口縁部はそのままおさめる。外面底部には回転糸切り痕がみられる。見込みは圏線状に窪む。全体に薄手である。45は体部が直線的に短く立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられ、その後ナデを施している。46は手づくねの土師器皿である。ての字形の土師器皿であるが、やや厚手化しており、口縁端部が丸みを帯びている。

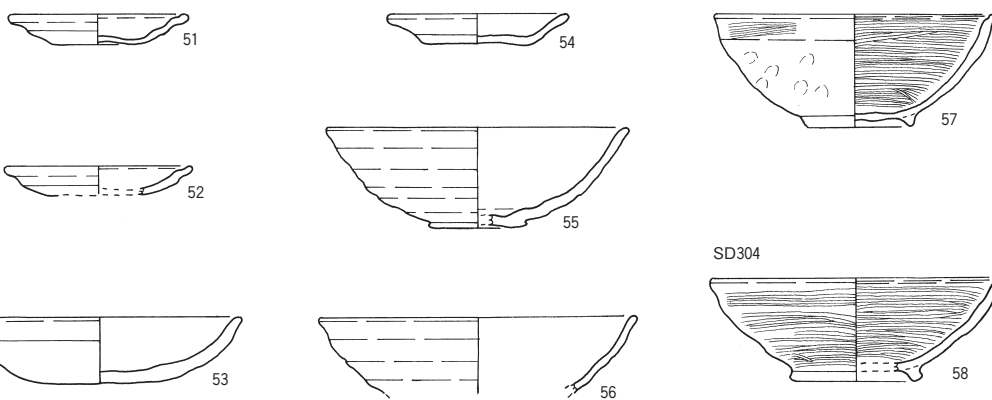
SD301



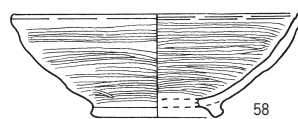
SD302



SD303



SD304



第32図 1区溝SD301~304出土遺物 (S=1:4)

47は白磁碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部には玉縁が付く。胎土は白色で、黒色粒が混じる。釉薬はやや青色がかった白色で、濁っている。薄く施釉されており、口縁内面には釉溜りがみられる。大宰府分類では白磁碗XI類。

48～50は須恵器碗である。48は体部が内湾して立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。平高台は非常に低く、段差が明瞭ではない。見込みには窪みがみられる。底部外面には回転糸切り痕がみられる。50は体部が内湾して立ち上がり、口縁部もそのまま丸くおさめる。底部には低い平高台を有し、見込み部分は窪んでいる。焼成が甘く、白色を呈している。磨滅も激しく、底部の切り離しの痕跡も残らない。

51～53は手づくねの土師器皿である。51・52はての字形の小皿である。口径はいずれも9cm代である。

53は体部が内湾して立ち上がり、口縁部はヨコナデ調整されており少し外反する。体部外面下半から底部にかけて見込みにはユビオサエが残る。54は須恵器皿である。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。底部外面には回転糸切り痕が残る。55・56は須恵器碗である。いずれも体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は少し外反する。55は底部には低い平高台を有し、見込みには窪みがみられる。底部外面には回転糸切り痕が残る。

57は瓦器碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部はやや外反して収める。高台は断面三角形のものが張り付き、口縁端部内面には沈線が巡る。内面には密にヘラミガキが施されている。外面は磨滅しており、わずかに口縁部付近にヘラミガキが確認できる。見込みも磨滅が激しいが、ジグザグ文の暗文が辛うじてみられる。大和型とみられる。

58は瓦器碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はそのまま丸くおさめる。高台はハの字状に広がる貼り付け高台である。口縁端部内面には沈線がめぐる。見込みはほとんど残存していないが、連結輪状文の暗文が施されているとみられる。ヘラミガキは内面には緻密にほどこされており、外面も底部付近まで確認できる。楠葉型とみられる。

SD301～SD304から出土した遺物の時期については、京都系土師器皿の型式では、京都Ⅳ期中～新段階に当てはまると考えられる。実年代では、11世紀中葉～後葉頃となる。また、相伴している東播系須恵器の型式などを考慮すれば、11世紀後葉が妥当な年代であると考えられる。

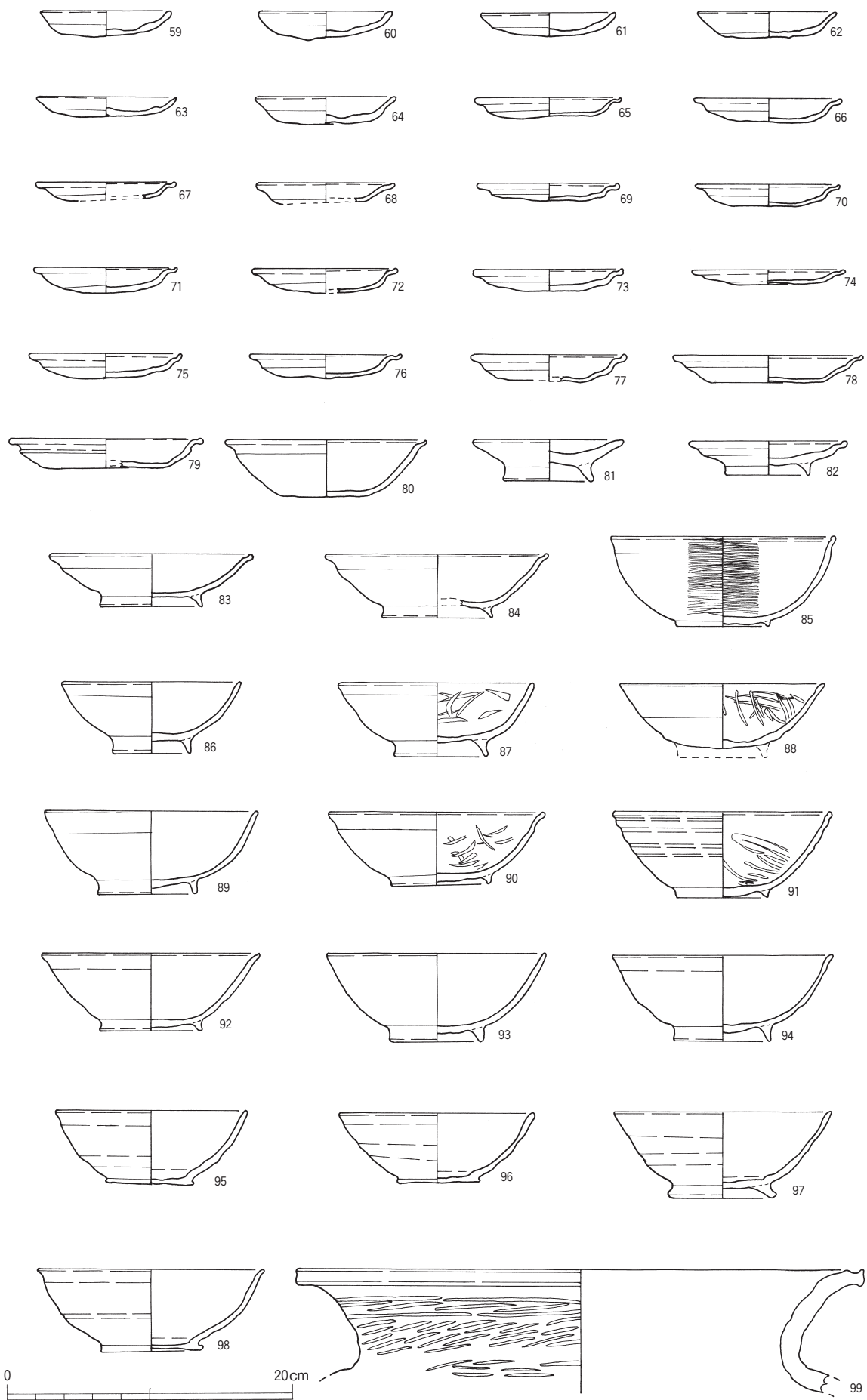
3区SX201出土遺物 (第33図)

SX201から出土した遺物には、土師器皿・坏・碗、黒色土器碗、須恵器碗・甕・壺、緑釉陶器などがある。

59～84は土師器である。59～64はロクロ成形の土師器皿、65～79は手づくねの土師器皿、80は土師器坏、81～84は高台付の土師器皿である。

ロクロ成形の土師器皿はいずれも口径が9cm台である。62・64は平坦な底部から体部が直線的に立ち上がる。底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。59も同じような器形であるが、切り離しは静止ヘラ切りであるとみられる。60・61・63は底部がやや丸底になっており、体部は短く立ち上がる。底部はヘラケズリで成形して、そのまま切り離しているとみられる。色調は総じて橙褐色で、胎土には赤色粒が混じる。

手づくねの土師器皿はすべて、ての字形のものである。口径は、65～77が10cm台で、78・79が13cm台である。いずれも口縁部をヨコナデし、端部をつまみ上げて調整している。底部内面はナデられており、底部外面にもナデがみられる個体がある。66には口縁部に灯明の痕跡がみられる。色調は総じて乳白色であり、胎土も比較的精良である。



第33図 3区落ち込みSX201出土遺物 (S=1:4)

80は土師器坏である。体部は緩やかに内湾し、口縁部は外反する。口縁端部はわずかに摘み上げている。外面には、体部下半から底部にかけて黒色化している。

81～84は高台付の土師器皿である。81はロクロ成形の皿である。やや厚手で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸く収める。底部にはハの字状に広がる高台が張り付く。82～84は手づくねの皿である。いずれも、皿部はハの字形の皿で、底部にハの字状に広がる高台が張り付く。

85～94は黒色土器碗である。このうち、85のみが両黒であり、それ以外はすべて内黒である。85は畿内型V類とみられる。体部は丸みをもって内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反させておさめる。口縁端部内面には浅い沈線が巡る。底部には低い高台が貼り付けられる。内外面ともに緻密なヘラミガキが施されている。底部外面には指頭圧痕が残り、凹凸がみられる。86～94は、いずれも体部がやや直線的に立ち上がり、口縁部はヨコナデによって調整される。口縁部が外反するものとしめないものがある。90・91・92には、口縁端部内面に浅い沈線が巡る。底部にはハの字状に開く高台が貼り付けられる。内面は基本的にナデ調整されており、87・88・90・91にはヘラミガキが施される。ヘラミガキはいずれも緻密ではなく、方向も揃っていない。胎土は比較的精良なものから粗雑なものまであり、個体によってバラつきがある。なお、黒色土器は破片資料も含めると、少なくとも20個体以上は出土しているとみられる。

95～98は須恵器碗である。95・96は平高台からやや内湾して体部が立ち上がり、口縁部はそのままおさめる。見込みには窪みがあり、底部外面には回転糸切り痕がみられる。98も同じように成形されているが、腰部に沈線が1条巡り、口縁部は外反する。97はハの字状に開いた貼り付け高台が付くタイプのものである。高台内には回転糸切り痕が残っている。

99は須恵器甕である。外面には体部から頸部にかけて横方向のタタキが施されている。口縁部は端部をつまみ上げ、内面には窪みをつくり、外面には面をつくっている。なお、図化し得ていないが、須恵器甕の破片は複数個体出土している。

これ以外に、図化できなかった資料として、緑釉陶器片、須恵器壺などが出土している。緑釉陶器は口縁部が出土しており、直線的な口縁をそのまま丸くおさめる。軟質な胎土に淡緑色の釉が薄く掛り、口縁端部には釉溜りがみられる。また、ヘラミガキがみられる。

SX201の年代について、京都系土師器皿の年代観を当てはめると、京都Ⅲ期新～Ⅳ期古段階になると考えられる。実年代でいえば10世紀末～11世紀前葉頃となる。共伴している遺物の年代もこれに矛盾するものではない。

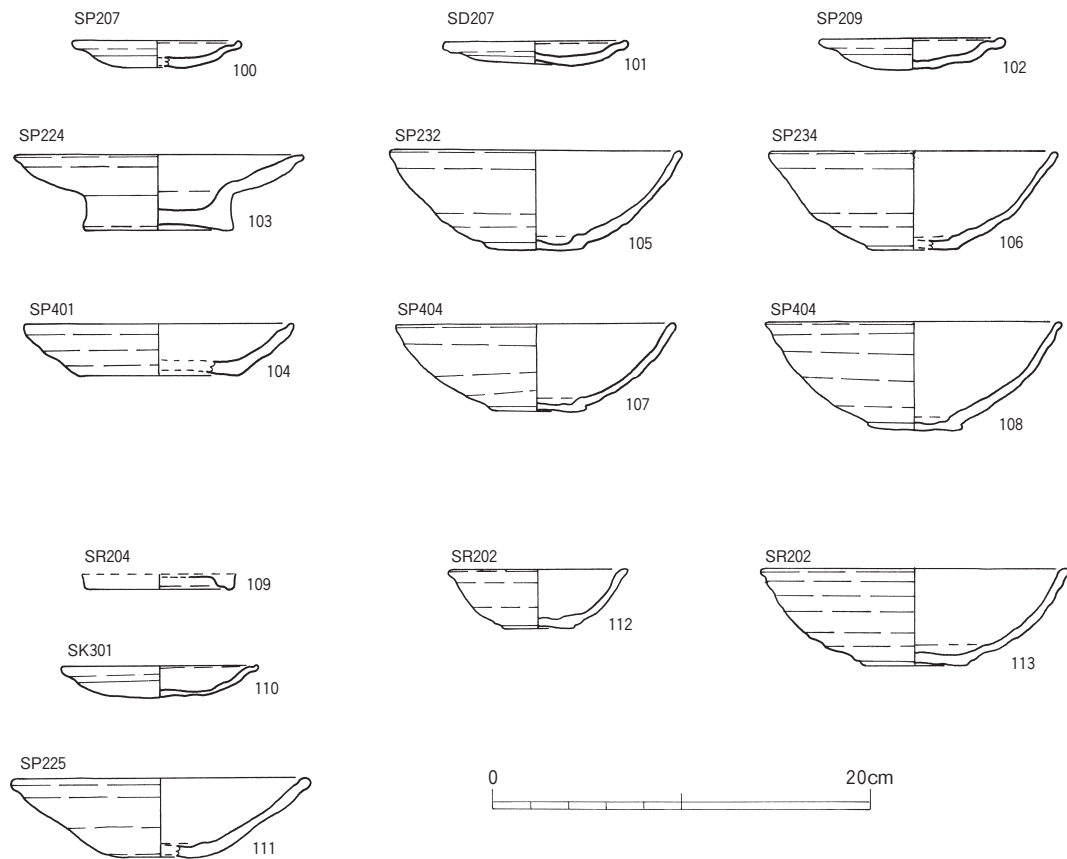
平安時代の遺構出土遺物 (第34図)

100～102は土師器皿である。100・101はSP207から102はSP209から出土した。いずれもハの字形の土師器皿である。100は薄手で、胎土も乳白色を呈し、口径は8.6cmである。一方、101・102はやや厚手で、胎土は灰黄褐色を呈し、口径は10cm台である。SP207・SP209はいずれもSB201を構成する柱穴である。土師器皿の年代観は、京都Ⅳ期中～新段階とみられ、11世紀中葉～後葉の実年代が与えられる。

103は1区SP224から出土した土師器托である。底部となる円盤の上面端部から体部を外側に直線的に立ち上げる。見込みには窪みがみられる。底面の切り離しは、回転ヘラ切りであるとみられる。

104は1区SP401から出土した土師器皿である。ロクロ成形の土師器皿で、体部は外反ぎみに立ち上がり、口縁部は内湾ぎみに収める。全体に厚手である。

105～108は須恵器碗である。105はSP232、106はSP234、107・108はSP404から出土した。い



第34図 平安時代の遺構出土遺物 (S=1:4)

いずれも体部がやや内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部は低い平高台となり、回転糸切り痕が残る。見込みには窪みがみられる。108は焼成が甘く、口縁部は褐色に近い色を呈する。これらの須恵器碗は11世紀後半の年代が与えられる。

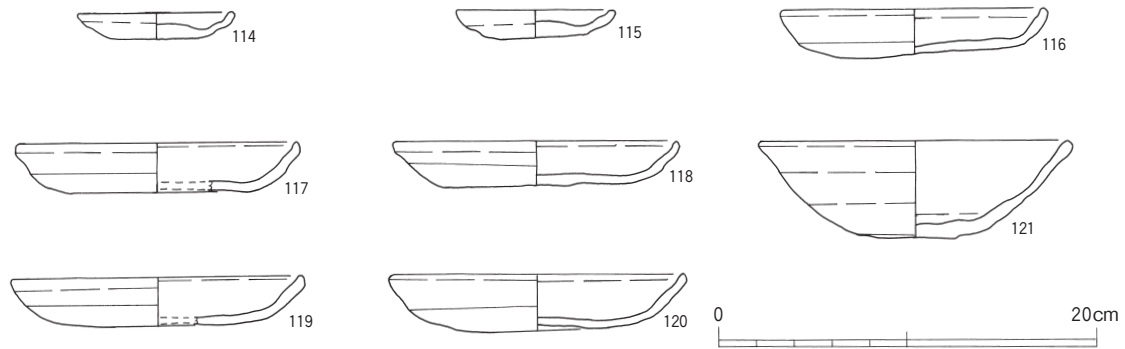
109は緑釉陶器碗である。SR204出土。有段の輪高台が張り付いており、釉薬は濃緑色を呈する。近江産であるとみられる。なお、図化できていないが、SR203からも緑釉陶器片が出土している。胎土は軟質で、濃緑色の釉がかかる。

110は土師器皿である。3区SK301出土。薄手のての字形の土師器皿である。底部内面には指頭圧痕が残る。111は2区SP225から出土した須恵器碗である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸く収める。底部外面には回転糸切り痕が残る。112・113は2区SR202から出土した須恵器碗である。112は小型の碗である。いずれも体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。底部にはわずかに平高台があり、回転糸切り痕が残る。

3区土器溜り出土遺物 (第35図)

114～121は3区の北西側、4区に近い場所から包含層掘削中に出土した。土器片が多量に出土するため周囲を精査したが、明確な遺構は検出されなかった。あるいは、落ち込み状の堆積が広がっていた可能性がある。

114・115はロクロ成形の小型の土師器皿である。体部は外反ぎみに立ち上がり、口縁部は上方につまむようにしておさめる。見込みは、周辺部が浅く圏線状に窪む。口径は8cm台である。



第35図 3区土器溜り出土遺物 (S=1:4)

116～120は手づくねの土師器皿である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は断面が三角形となる。いわゆる面取り調整が施されている。口径は14cm台が中心となり、色調はいずれも淡橙褐色である。121は須恵器碗である。体部はやや直線的に立ち上がり、口縁部はそのまま丸くおさめる。底部には明確な平高台は認められない。見込みには窪みがみられる。

土師器皿の年代は、京都VI期古段階であるとみられ、実年代では12世紀末から13世紀初頭頃と考えられる。

包含層出土遺物 (第36図)

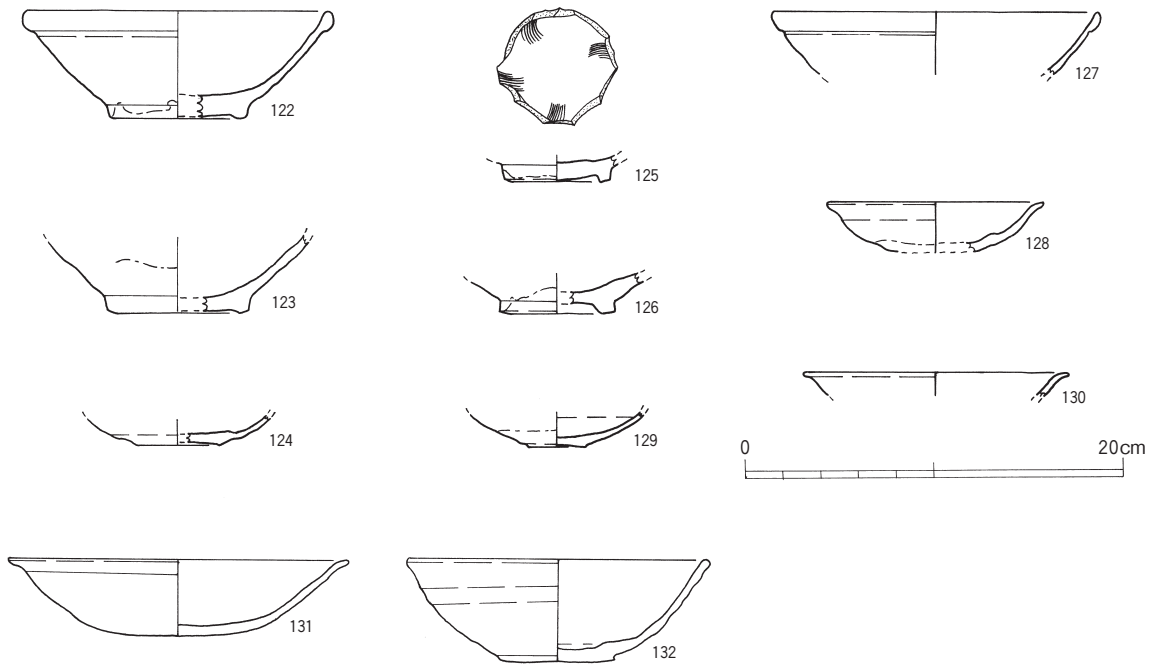
122・123は1区包含層出土の白磁碗である。122は少し黄みがかかった釉薬が高台付近まで掛っており、玉縁の部分には釉垂れがみられる。全体に細かな貫入がある。123は白濁した釉薬が掛っており、外面は下半部が露胎である。内面は表面に細かな凹凸がみられる。いずれも大宰府分類で白磁碗IV類である (以下、すべて大宰府分類)。

124は2区包含層出土の白磁皿である。碁笥底の皿で、内面には底部と体部の境界に沈線が巡る。釉薬は黄みがかかった透明釉で、外面には底部付近まで掛る。細かな貫入がみられる。白磁皿VI類。

125・126は3区出土の白磁碗である。125は包含層出土。高台の畳付は斜めに削られており、外側が少し浮く。釉薬は灰色を帯びて白濁しており、外面は高台付近まで掛っている。胎土は灰色を帯びて緻密である。見込みに櫛目文が入る。126は第2遺構面検出中に出土した。高台は幅広の輪高台で、ハの字状に開く。釉薬は黄みがかかった透明釉で、高台付近まで薄く掛り、貫入がみられる。胎土は灰色がかかった白色で、畳付に褐色の焦げたような痕跡が付く。白磁碗IV類。

127～130は4区第2面上層包含層出土の陶磁器である。127は白磁碗である。薄手で、口縁部には扁平な玉縁を持つ。玉縁の下には沈線が巡る。釉薬は黄緑色がかかった透明釉が薄く掛る。胎土は灰白色で黒色粒を含む。白磁碗II類。128は白磁皿である。口縁部は器壁が薄くなり、外反する。見込みには沈線が巡る。釉薬は黄みがかって白濁しており、体部下半以下は露胎である。胎土は灰白色である。白磁皿V類。129は白磁皿とみられるが、胎土は灰色であり、釉薬も緑色がかっている。焼成不良か。白磁皿VI類。130は緑釉陶器碗である。器壁が薄く、口縁部は外反して収める。胎土は灰色で硬質であり、釉薬は濃緑色を呈す。

131は土師器皿である。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部はヨコナデによって外反している。非常に丁寧に作られており、一見すると手づくねのようであるが、底部外面に回転糸切り痕がわずかに残っており、ロクロ成形されたものであることがわかる。2区の第2遺構面上、掘立柱建物SB202の近くから出土した。



第36図 包含層出土遺物 (S=1:4)

132は須恵器埴である。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部はそのままおさめている。平高台には回転糸切り痕が残る。見込みは窪んでいる。1区包含層から出土している。

なお、細片のため図化できなかったが、今回の調査では緑釉陶器が複数個体出土している。1区では包含層より2個体出土している。いずれも底部が残存している。一方は、淡橙褐色の軟質な胎土に濃緑色の釉薬が高台内まで施釉される。高台は貼り付けの輪高台である。もう一方は、淡橙褐色の軟質な胎土に淡緑色の釉薬が高台内まで施釉される。高台は貼り付けの三角高台である。2区では包含層より1個体出土している。底部が残存しており、三角高台が貼り付けられる。淡橙褐色の軟質な胎土で、釉薬は濃緑色を呈す。高台内に施釉は確認できない。

参考文献

出土遺物に関しては、下記の文献を参考にした。

森田克行「摂津地域」寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社1990

『弥生土器集成と編年－播磨編－』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第5号 大手前大学史学研究所 2007

中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社1995

『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会2000

小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房2005

第2表 遺物観察表

図番号	遺構	器種	器形	口径	底径	器高	胎土	色調	実測番号
1	1区SK401	弥生土器	鉢	22.1	4.8	15.1	径～10mmの赤色粒含む	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	26
2	1区SK401	弥生土器	高坏	—	15.4	(11.3)	径～4mmの赤色粒・長石含む	7.5YR7/6 黄褐色	27
28	1区SK401	弥生土器	甕	(15.2)	—	(6.2)	径～4mmの赤色粒・長石含む	10YR7/4 にぶい黄褐色	28
4	1区SK401	弥生土器	竊孳車	直径5.1	—	厚さ0.8	精良	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	30
5	1区SK401	弥生土器	鉢	5.6	—	2.8	径～2mmの石英含む	10YR7/4 にぶい黄褐色	18
6	2-1区SK301	弥生土器	有孔鉢	(18.6)	2.1	11.8	径～2mmの長石含む	10YR7/4 にぶい黄褐色	13
7	2-1区SK301	弥生土器	鉢	—	4.4	(5.8)	径～4mmの赤石多量含む	5YR6/6 褐色	25
8	2-1区SK301	弥生土器	鉢	(16.4)	—	(7.5)	径～2mmの赤石多量含む	5YR6/4 にぶい赤褐色	22
9	2-1区SK301	弥生土器	甕	—	3.6	14.9	径～4mmの赤石少量含む	5YR5/4 にぶい赤褐色	20
10	2-1区SK301	弥生土器	広口甕	(15.4)	—	14.0	径～4mmの赤石少量含む	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	15
11	2-1区SK301	弥生土器	甕	(14.6)	(5.0)	17.5	径～4mmの赤石多量含む	5YR6/6 褐色	23
12	2-1区SK301	弥生土器	甕	(14.6)	—	(18.7)	径～2mmの赤石含む	5YR5/4 にぶい赤褐色	6
13	2-1区SK301	弥生土器	甕	17.4	—	27.7	径～2mmの赤石含む	5YR5/4 にぶい赤褐色	2
14	2-1区SK301	弥生土器	甕	16.4	3.9	22.1	径～2mmの赤石少量含む	5YR6/6 褐色	3
15	2-1区SK301	弥生土器	甕	15.8	14.3	29.2	径～2mmの赤石含む	5YR6/6 褐色	1
16	2-1区SK301	弥生土器	甕	(18.1)	(4.5)	29.6	径～2mmの赤石含む	5YR6/6 褐色	14
17	2-1区SK301	弥生土器	甕	19.3	4.0	32.8	径～2mmの赤石含む	7.5YR6/6 褐色	16
18	2-1区SK301	弥生土器	鉢	6.4	—	3.3	精良	10YR7/4 にぶい黄褐色	17
19	2-1区SK301	弥生土器	高坏	—	10.4	(6.8)	径～2mmの赤色粒・石英含む	10YR6/4 にぶい黄褐色	24
20	2-1区SK301	弥生土器	高坏	23.6	—	(14.3)	径～2mmの赤色粒・長石多量含む	7.5YR7/6 褐色	11
21	2-1区SK301	弥生土器	高坏	21.0	13.1	13.2	径～3mmの赤石含む	5YR6/6 褐色	10
22	2-1区SK301	弥生土器	甕	10.4	3.7	10.7	径～3mmの赤色粒・石英含む	5YR6/6 褐色	5
23	2-1区SK301	弥生土器	甕	(13.4)	4.2	11.7	径～2mmの赤石含む	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	21
24	2-1区SK301	弥生土器	鉢	24.4	2.4	12.8	径～3mmの赤石含む	5YR6/6 明赤褐色	12
25	2-1区SK301	弥生土器	鉢	24.2	4.4	12.6	径～2mmの赤石含む	5YR5/6 明赤褐色	7
26	2-1区SK301	弥生土器	鉢	15.2	3.3	9.2	径～1mmの赤石含む	5YR6/6 褐色	8
27	2-1区SK301	弥生土器	鉢	13.7	4.1	9.1	径～1mmの赤石含む	5YR6/6 褐色	9
28	2-1区SK301	弥生土器	鉢	18.4	4.5	9.3	径～1mmの赤石含む	5YR6/6 褐色	4
29	2-1区SK301	弥生土器	広口甕	24.8	8.4	5.1	径～5mmの赤色粒含む	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	29
30	1区SD301	須恵器	血	(9.2)	(5.4)	1.5	径～1mmの赤石少量含む	10YR8/4 浅黄褐色	39
31	1区SD301	須恵器	血	10.1	4.2	1.8	径～2mmの赤石少量含む	10YR7/4 にぶい黄褐色	35
32	1区SD301	須恵器	血	(10.0)	(7.0)	—	精良	5YR6/6 褐色	46
33	1区SD301	須恵器	血	9.2	—	1.5	精良	7.5YR7/6 褐色	36
34	1区SD301	須恵器	坏	14.4	7.0	4.0	径～2mmの赤色粒含む	7.5YR7/6 褐色	33
35	1区SD301	須恵器	坏	(15.0)	(7.6)	3.6	精良	7.5YR7/6 褐色	38
36	1区SD301	須恵器	坏	15.2	(9.4)	—	径～2mmの赤石含む	10YR7/4 にぶい黄褐色	37
37	1区SD301	須恵器	坏	15.0	—	3.4	径～2mmの赤色粒少量含む	7.5YR7/4 浅黄褐色	34
38	1区SD301	須恵器	坏	(15.3)	—	3.5	径～1mmの赤石少量含む	10YR7/4 にぶい黄褐色	41
39	1区SD301	瓦器	碗	(15.2)	—	(5.5)	精良	5N 灰色	42
40	1区SD301	須恵器	血	(9.0)	(5.9)	1.3	径～2mmの赤石少量含む	2.5Y6/1 黄灰色	44
41	1区SD301	須恵器	血	(15.0)	(4.0)	5.3	径～3mmの赤石少量含む	2.5Y7/1 灰白色	43
42	1区SD301	白磁	碗	(11.2)	—	(2.8)	精良	灰白色	31
43	1区SD301	須恵器	鉢	(27.0)	—	(4.4)	径～2mmの赤石・石英含む	4N 灰色	52
44	1区SD302	須恵器	鉢	8.9	5.7	1.2	径～2mmの赤石含む	10YR8/4 浅黄褐色	49
45	1区SD302	須恵器	血	9.3	4.9	1.8	径～2mmの赤石・石英含む	10YR7/4 にぶい黄褐色	50
46	1区SD302	須恵器	血	9.6	—	1.4	精良	10YR7/4 にぶい黄褐色	53
47	1区SD302	白磁	碗	(13.6)	—	(4.2)	精良	6N 灰色	32
48	1区SD302	須恵器	碗	(14.0)	(3.9)	5.8	径～2mmの赤石含む	6N 灰色	51
49	1区SD302	須恵器	碗	(17.0)	—	(4.0)	径～2mmの赤石少量含む	2.5Y6/1 黄灰色	61
50	1区SD302	須恵器	碗	(16.5)	(5.9)	6.3	径～4mmの赤石多量含む	2.5Y7/1 灰白色	48
51	1区SD302	須恵器	血	(9.6)	—	1.6	径～1mmの赤石少量含む	10YR8/4 浅黄褐色	58
52	1区SD302	須恵器	血	(10.0)	—	1.5	径～1mmの赤石含む	10YR8/3 浅黄褐色	60
53	1区SD302	須恵器	血	15.1	—	3.5	径～2mmの赤色粒・長石含む	10YR8/2 灰白色	56
54	1区SD302	須恵器	血	9.6	5.7	1.7	精良	2.5Y6/1 黄灰色	55
55	1区SD302	須恵器	碗	(16.1)	(5.2)	5.3	径～4mmの赤石少量含む	6N 灰色	57
56	1区SD302	須恵器	碗	15.4	—	(4.7)	径～4mmの赤石含む	5N 灰色	59
57	1区SD302	瓦器	碗	14.9	5.7	6.0	精良	5N 灰色	54
58	1区SD302	瓦器	碗	(15.6)	(7.1)	5.5	精良	5N 灰色	62
59	3区SX201	須恵器	血	9.7	—	1.8	径～1mmの赤石含む	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	68
60	3区SX201	須恵器	血	9.4	—	2.0	径～2mmの赤色粒少量含む	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	69
61	3区SX201	須恵器	血	9.5	—	1.7	径～2mmの赤色粒少量含む	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	70
62	3区SX201	須恵器	血	9.8	6.5	1.8	径～2mmの赤色粒・長石含む	5YR6/4 にぶい黄褐色	71
63	3区SX201	須恵器	血	(9.9)	(9.9)	—	径～1mmの赤色粒少量含む	10YR8/3 浅黄褐色	72
64	3区SX201	須恵器	血	(9.9)	(6.6)	1.9	径～3mmの赤色粒少量含む	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	67
65	3区SX201	須恵器	血	10.3	—	1.4	精良	10YR8/3 浅黄褐色	63
66	3区SX201	須恵器	血	10.4	—	1.7	精良	10YR8/3 浅黄褐色	74
67	3区SX201	須恵器	血	10.0	—	1.3	精良	10YR7/4 にぶい黄褐色	78
32	3区SX201	土師器	皿	9.7	—	1.5	精良	7.5YR8/3 浅黄褐色	64
33	3区SX201	土師器	皿	10.1	—	1.2	精良	10YR8/3 浅黄褐色	76
34	3区SX201	土師器	皿	10.3	—	1.8	径～1mmの赤石含む	10YR8/3 浅黄褐色	75
35	3区SX201	土師器	皿	10.6	—	1.6	径～2mmの赤石含む	10YR8/4 浅黄褐色	73
36	3区SX201	土師器	皿	10.7	—	1.7	径～2mmの赤石少量含む	10YR8/3 浅黄褐色	79
37	3区SX201	土師器	皿	10.8	—	1.0	精良	10YR8/4 浅黄褐色	80
38	3区SX201	土師器	皿	10.9	—	1.9	精良	10YR8/3 浅黄褐色	86
39	3区SX201	土師器	皿	10.9	—	1.8	精良	7.5YR8/4 浅黄褐色	83
40	3区SX201	土師器	皿	13.4	—	2.1	精良	10YR7/3 にぶい黄褐色	82
41	3区SX201	土師器	皿	14.2	(6.0)	4.0	径～2mmの赤石少量含む	10YR7/3 にぶい黄褐色	87
42	3区SX201	土師器	皿	(10.6)	(6.4)	2.9	径～4mmの赤石含む	10YR7/4 にぶい黄褐色	86
43	3区SX201	土師器	皿	11.2	6.0	2.4	径～2mmの赤色粒含む	5YR6/4 にぶい黄褐色	81
44	3区SX201	土師器	碗	(4.3)	(7.2)	3.7	径～2mmの赤色粒含む	5YR6/6 褐色	85
45	3区SX201	土師器	碗	(15.8)	(7.8)	4.4	径～2mmの赤色粒含む	5YR6/4 にぶい黄褐色	84
46	3区SX201	土師器	碗	(15.6)	(6.6)	6.3	精良	3N 暗灰色	97
47	3区SX201	土師器	碗	(15.6)	(5.5)	5.0	径～3mmの赤色粒・長石含む	5YR7/6 褐色	92
48	3区SX201	土師器	碗	13.8	6.6	5.2	径～2mmの赤色粒・長石多量含む	10YR8/4 浅黄褐色	89
49	3区SX201	土師器	碗	(14.4)	—	(4.6)	径～2mmの赤色粒少量含む	7.5YR7/6 褐色	94
50	3区SX201	土師器	碗	15.0	7.0	5.8	径～3mmの赤色粒含む	7.5YR7/6 褐色	90
51	3区SX201	土師器	碗	15.3	7.0	5.2	径～2mmの赤色粒・長石少量含む	7.5YR7/6 褐色	88
52	3区SX201	土師器	碗	(15.4)	(6.4)	6.0	径～3mmの赤色粒含む	10YR7/2 にぶい黄褐色	93
53	3区SX201	土師器	碗	(15.4)	(7.2)	5.4	径～3mmの赤石少量含む	7.5YR7/6 褐色	96
54	3区SX201	土師器	碗	(15.4)	(6.6)	6.2	径～5mmの赤色粒少量含む	7.5YR7/6 褐色	95
55	3区SX201	土師器	碗	(15.5)	(6.8)	6.0	径～7mmの赤色粒少量含む	6N 灰色	100
56	3区SX201	土師器	碗	13.3	6.1	5.2	径～7mmの赤石少量含む	6N 灰色	99
57	3区SX201	土師器	碗	13.6	5.8	5.0	径～3mmの赤石少量含む	6N 灰色	98
58	3区SX201	土師器	碗	15.3	7.6	6.1	径～1mmの赤石少量含む	6N 灰色	101
59	3区SX201	土師器	碗	15.9	7.2	5.9	径～2mmの赤石少量含む	5N 灰色	102
60	3区SX201	土師器	碗	39.6	—	9.6	径～2mmの赤色粒少量含む	10YR8/4 浅黄褐色	108
61	3区SX201	土師器	碗	9.0	—	1.4	径～1mmの赤色粒少量含む	10YR8/3 浅黄褐色	107
62	3区SX201	土師器	碗	9.9	—	1.3	径～1mmの赤石・雲母含む	10YR8/3 浅黄褐色	105
63	3区SX201	土師器	碗	9.9	—	1.6	径～3mmの赤石少量含む	10YR7/3 にぶい黄褐色	106
64	3区SX201	土師器	托	15.4	8.0	4.0	径～3mmの赤石少量含む	10YR8/4 浅黄褐色	104
65	3区SX201	須恵器	碗	(15.4)	(5.2)	5.2	径～2mmの赤石少量含む	4N 灰色	109
66	3区SX201	須恵器	碗	(15.6)	(4.4)	5.2	径～7mmの赤石少量含む	6N 灰色	110
67	3区SX201	須恵器	碗	(14.4)	(8.6)	2.7	径～2mmの赤石少量含む	10YR6/3 にぶい黄褐色	111
68	3区SX201	須恵器	碗	15.0	5.0	4.6	径～5mmの赤石少量含む	6N 灰色	103
69	3区SX201	須恵器	碗	15.4	5.0	5.7	径～4mmの赤色粒・長石含む	2.5Y7/1 灰白色	104
70	3区SX201	須恵器	碗	—	(8.0)	(0.8)	精良	10YR8/3 浅黄褐色	119
71	3区SX201	須恵器	碗	10.5	—	1.6	精良	10YR7/3 にぶい黄褐色	114
72	3区SX201	須恵器	碗	(16.0)	(5.7)	4.2	径～3mmの赤石多量含む	2.5Y7/1 灰白色	112
73	3区SX201	須恵器	坏	(9.6)	(3.9)	3.1	精良	7N 灰白色	116
74	3区SX201	須恵器	坏	(16.6)	(5.3)	5.1	径～2mmの赤石含む	2.5Y7/1 灰白色	115
75	3区SX201	土師器	皿	8.3	4.5	1.4	径～2mmの赤石少量含む	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	136
76	3区SX201	土師器	皿	15.1	—	2.6	径～2mmの赤石少量含む	10YR7/4 にぶい黄褐色	135
77	3区SX201	土師器	皿	14.1	—	2.6	精良	10YR7/4 にぶい黄褐色	131

第3章 まとめ

第1節 遺構の変遷について

(1) 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、主なものとして土器棺墓、土器溜り、土坑などを検出した。時期は概ね後期後半にまとまっている。また、調査区全体において、包含層からも一定量の弥生土器が出土している。

祇園遺跡における周辺の調査では、弥生時代中期～古墳時代初頭の集落跡が見つまっている。今回の調査地点もこの集落の範囲に含まれていると考えられる。ただし、今回の調査では竪穴建物などの遺構は見つかっておらず、居住域からは外れていると思われる。過去の調査成果に鑑みれば、集落の中心部は平野交差点北東付近に展開していたと考えられ、今回の調査地点は集落の北辺部に当たっているとみられる。また、今回見つかった遺構は後期後半のものに限られることから、調査地周辺が集落の範囲に含まれていた時期はそれほど長期に及んでいなかったと推測される。

今回の調査では、各調査区で土石流に起因すると思われる礫の堆積がみられた。具体的に土石流が起きた時期や回数はわからないが、この場所は山地にほど近く、土石流の被害に遭いやすい場所だったと推定される。あるいは、それ故に居住域には適さず、安定的に土地利用がされなかったとも考えられる。

(2) 平安時代の遺構

平安時代の遺構は、中期～後期にかけていくつかの時期のものが検出された。時期ごとに変遷を追ってみたい。

①10世紀末～11世紀前葉

この時期の遺構としては3区落ち込みSX201が挙げられる。遺構の性格は必ずしも明確ではないが、遺物の出土状況からみて単純な廃棄土坑ではないことがいえる。また、出土遺物には、ての字形の土師器皿や緑釉陶器などが含まれているのも特徴的である。

②11世紀後半

この時期の主な遺構としては、1区掘立柱建物SB202、溝SD301～304、3区溝SR202・203・204などが挙げられる。また、1区や3区で検出したピット群の多くはこの時期のものであると考えられる。

掘立柱建物はSB202のみが復元できたが、多くのピットが存在することから、本来は複数の建物が存在した可能性が高い。

溝SR202・203・204を境として、遺構の密度が異なっていることから、何らかの境界を果たしていた可能性が考えられる。また、溝SD301・302も同一の方向に展開していることから、関連する遺構である可能性がある。ただ、今回の調査範囲内ではそれ以上の展開はわからず、可能性を指摘するにとどめておく。

この時期の遺構からも、ての字形の土師器皿や緑釉陶器が出土している。緑釉陶器は破片が中心であるが、包含層出土のものを加えると、10点近く出土している。また、灰釉陶器片も数点出土していることを確認している。これらの出土遺物からみて、今回見つかった遺構は単なる集落遺跡ではなく、何らかの施設に伴うものであったことが推測される。

③12世紀後葉

この時期の遺構は、2区掘立柱建物SB202が挙げられ、掘立柱建物SB203も同時期の可能性が高い。また、3区で検出した土器溜りもこの時期である。

この時期は従来から知られているように、平家政権下でいわゆる「福原遷都」が行われた前後の時期に当たっている。今回見つかった建物も、平家の邸宅や福原宮に関連するものであると考えられる。土器溜りから出土した土師器皿は京都系土師器皿であり、使用者はおのずと限定されてくる。

ただ、園池遺構が見つかった第2・5次調査に近い調査区の西側では遺構が見つかっていない。今回の調査地とは100mも離れてはいないが、間には空地が広がっていたのであろうか。

第2節 平安時代中期の祇園遺跡周辺について

今回の調査では11世紀代に属する掘立柱建物や落ち込みなど、平安時代中期の遺構が複数検出された。また、出土遺物には緑釉陶器やての字形の土師器皿が含まれている点も興味深い。

祇園遺跡における過去の調査では、平安時代中期の遺構は全く見つかっておらず、今回の調査が初めてである。従来、平家の邸宅が造営される以前の祇園遺跡周辺の様相は不明だったが、今回の調査によって、すでに平安時代中期には調査地周辺の開発が行われていたことが明らかとなった。

ここでは、祇園遺跡周辺の平安時代の様相を概観した上で、今回見つかった平安時代中期の遺構について、少し考察してみたい。

平安時代前期の遺跡としては、園池遺構や掘立柱建物が見つかった下山手北遺跡が挙げられる。見つかった遺構からは、貴族の邸宅と想定される施設が存在したことが明らかとなった。また、皇朝十二銭の「長年大宝」が59枚出土しており、建物は9世紀中葉に建てられたことが判明している。御蔵遺跡でも、奈良時代から継続する遺跡が見つかっており、複数の掘立柱建物が見ついている。皇朝十二銭の「富寿神宝」や「寛平大宝」のほか、硯や緑釉陶器も出土しており、官衙的な施設があったことがわかっている。

平安時代中期の遺跡には、上沢遺跡や神楽遺跡がある。上沢遺跡では、平安時代中期から後期にかけての複数の掘立柱建物が見ついている。神楽遺跡では、平安時代中期の溝から緑釉陶器や灰釉陶器、「東福」と書かれた墨書土器が出土しており、これとは別に大型の掘立柱建物が見ついている。

このように、平安時代前期から中期にかけての遺跡は複数見ついているが、これらの遺跡に共通していることは、いずれも古代の山陽道に近いと考えられる地点に存在することである。ところが、祇園遺跡は山手に所在しており、山陽道からは離れている。遺跡の近くには現在、有馬街道が通っている。この道は、平安時代末期には福原宮の中軸として捉えられていることから、それ以前から主要な道路であった可能性は十分に考えられる。そうであれば、今回見つかった遺構は街道沿いの何らかの施設だと説明できるが、平安時代末期以前の有馬街道については詳細が不明であり根拠に乏しい。

いずれにしても、今回見つかった遺構は単なる集落に伴うものではないと考えられる。具体的な手がかりには欠けるが、ここでは在地の有力者クラスの邸宅などの可能性を挙げておきたい。

平安時代後期になり、祇園遺跡周辺には平家の別業が造営されるが、あるいは、すでに開発されていたこの地に目をつけて、この場所を選んだのかもしれない。今後、周辺の調査が進展することで、平家以前の福原の様相が明らかとなることを期待する。

写 真 图 版

図版 1



土器棺墓ST301出土遺物



出土陶磁器



落ち込みSX301出土遺物



1区第1遺構面全景（南から）



1区礎石建物SB101（南東から）

図版 3



1区第2遺構面全景 (南から)



1区第3遺構面全景 (南から)



1区
溝SD301～304 (東から)



1区ピットSP209
遺物出土状況 (北から)



1区ピットSP404
遺物出土状況 (南から)

図版 5



1区
土坑SK401 (東から)



2区
第1遺構面全景 (南西から)



3区
第1遺構面全景 (西から)



2～4区第2遺構面全景（南西から）

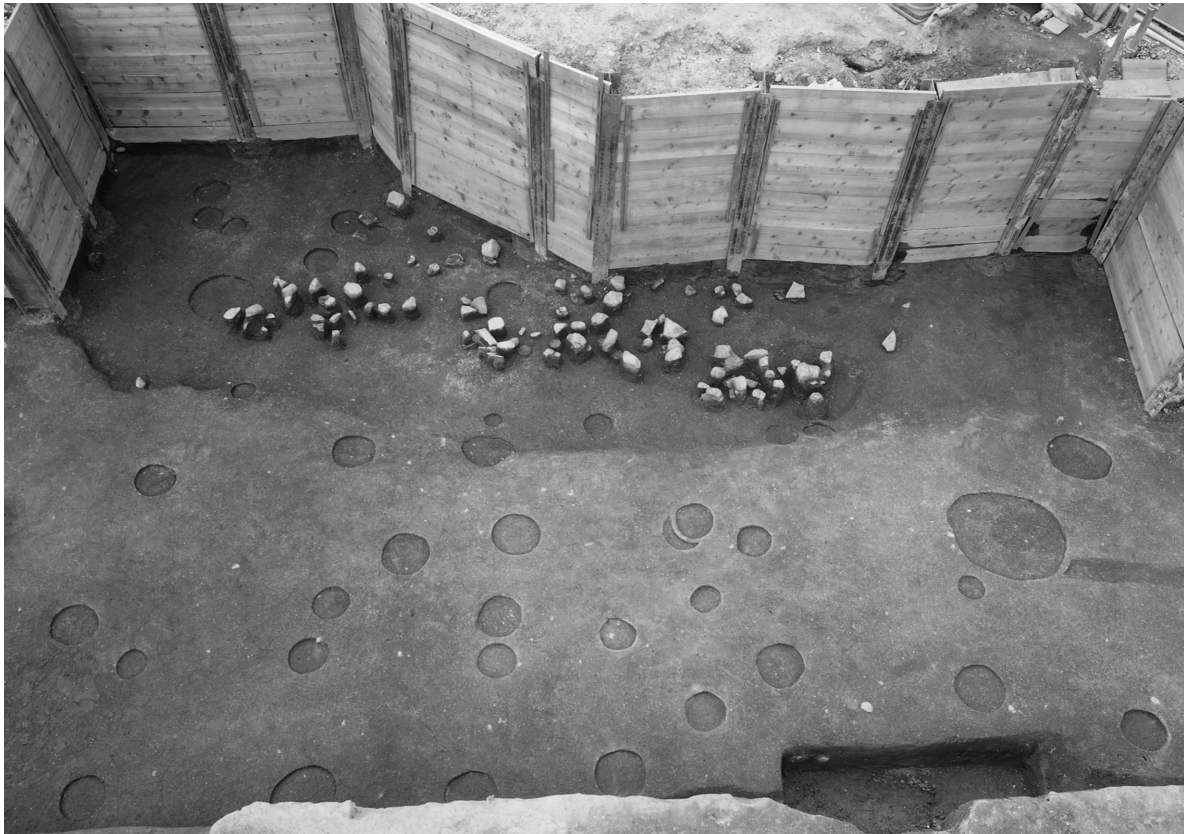


2～4区第2遺構面全景（北東から）

図版 7



2区掘立柱建物SB202 (北西から)



3区落ち込みSX201・ピット群 (南東から)

2区
第3遺構面全景（南西から）



2-1区
第3遺構面全景（西から）



2-2区
第3遺構面全景（西から）



図版 9



2-3区
第3遺構面全景（西から）



2-4区
第3遺構面全景（南西から）



3-7区
第3遺構面全景（南東から）

4-5区
第3遺構面全景（南東から）



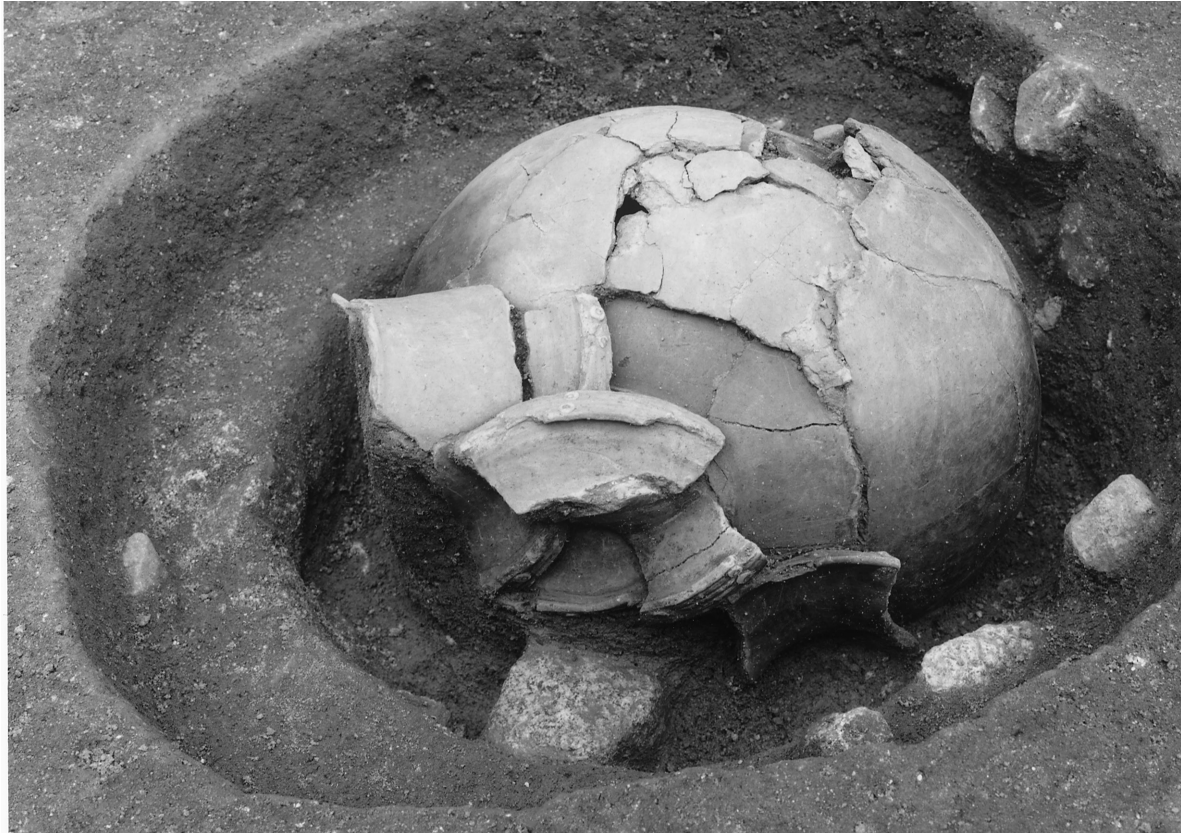
4-6区
第3遺構面全景（北西から）



3・4-8区
第3遺構面全景（南から）



図版11



2-1区土器棺墓ST301遺物出土状況（南から）



2-1区落ち込みSX301遺物出土状況（北東から）



図版13



落ち込みSX301出土遺物



落ち込みSX301出土遺物

図版15



落ち込みSX301出土遺物 土坑SK401出土遺物



图版17



溝SD301~304出土遺物



落ち込みSX201出土遺物

図版19



落ち込みSX201出土遺物



報 告 書 抄 録

ふりがな	ぎおんいせき だい21じはっくつちようさほうこくしょ							
書 名	祇園遺跡 第21次発掘調査報告書							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編 著 者 名	川上厚志・岡田健吾							
編 集 機 関	神戸市教育委員会							
所 在 地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-6480							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぎおんいせき 祇園遺跡	ひょうごけんこうべし 兵庫県神戸市 ひょうごくかみぎおんちよう 兵庫区上祇園町	28105	4-7	34° 41' 31"	135° 10' 04"	20140714 ～ 20140917	485㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構主な遺物		主な遺物		特記事項	
祇園遺跡	集落	弥生時代 平安時代	土器棺墓、土器溜り 掘立柱建物、溝、落ち込み		弥生土器 土師器、須恵器、黒色土器			
要約								
<p>弥生時代後期の遺構は、土器棺墓、土器溜り、土坑などを検出した。土器棺墓には、大型の広口壺が埋められていた。土器溜りからは甕や高坏がまとまって出土している。</p> <p>平安時代中期の遺構は、掘立柱建物、溝、落ち込みなどを検出した。各遺構からは京都系土師器皿が出土している。落ち込みからは、黒色土器、須恵器、土師器などがまとまって出土している。また、緑釉陶器が出土している。</p> <p>平安時代後期の遺構は、掘立柱建物、土器溜りなどを検出した。平家の邸宅や福原宮に関連する遺構であると考えられる。土器溜りからは京都系土師器皿が出土している。</p>								

祇園遺跡第21次発掘調査報告書

2016. 3. 31

発 行 神戸市教育委員会文化財課
〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-5799

印 刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1-1
TEL 078-371-7000